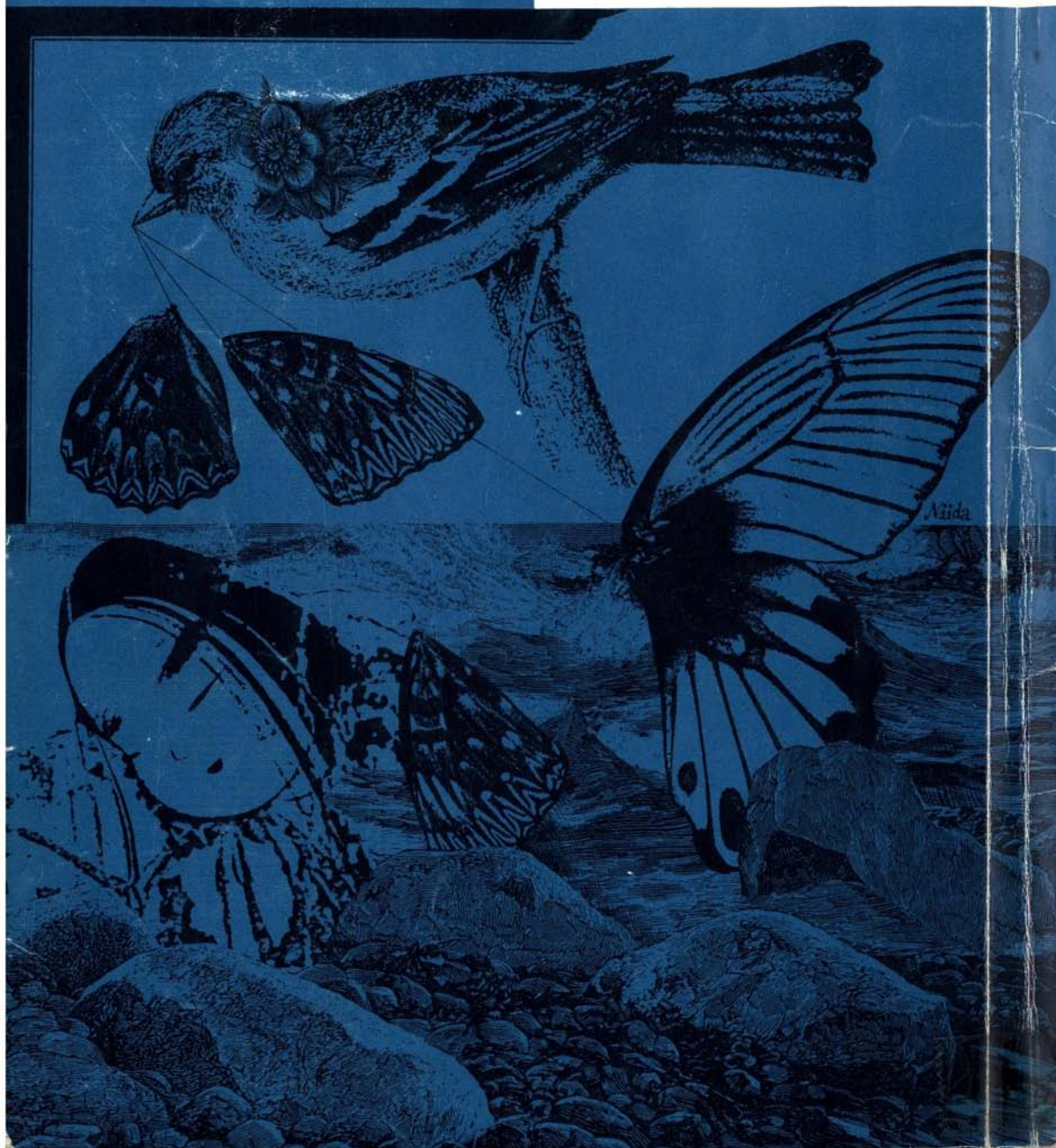


わいふ

139

特集
日本の夫



考える

主婦のための雑誌

わいふ

日本のおんなたち
暮しのなかに
閉じこもっているおんなたち
わたしたちは 満ちたりて
心ゆたかに 生きているのか
やさしい夫と 可愛い子どもが
わたしたちのすべてなのか？

閉ざされた家のなか
手探りしているおんなたち
わたしたちの力を持ち寄ろう
探し出そう ほんとうの
やさしさと 強さとは
どこにあるのか
心ゆたかな おんなの暮らしは
どこにあるのか

男たちのかげにかくれ
もの言わぬおんなたち
わたしたちの言葉を持ち寄ろう
探したそう ほんとうの
喜びと 悲しみは
どこにあるのか
心ゆたかな おんなの暮らしは
どこにあるのか

投稿は原則としてすべて掲載します。長さ二千字まで。
テーマ原稿の他、随筆、家事のヒント、問題提起など。
(特定の宗教、政党の宣伝にわたるもの、「わいふ」の
品位をとくに傷つけるものはお断りします)

わ い ふ ————— 139号

内助の夫②——ここにもいたすばらしい夫族——山本健二＝2

投稿欄ずいひつ 上蘭めぐみ・井上桂子・中野桂子・立野匡子・田中喜美子＝5

食品添加物のはなし 青木やよひ＝10

食品情報 カロチン玉子・安全な冷凍ちくわ＝12

一冊の本 A・モンタギュー著 女はすぐれている＝13

私のひとこと 138号によせて 青木知子・橋本宏子・小椋昌子・矢内花籠・

青木やよひ＝14

特集日本の夫

夫必読のアンケート＝18

四十代の夫・菊地一絵 日本の夫あれこれ・徳光利子＝28

東の夫・西の夫＝30

性の終身雇用 大庭みな子＝32

サムライ・日本の夫 和田好子＝35

高校生座談会＝41

家庭菜園 和田直久＝46

おしゃべり 三矢久子・樺逸子・永堀のり子・上本葉子・野口喜子・小川倍恵・

平子幸子・中西淳子・青木知子・杉本輝子＝48

お知らせ＝50

表紙 新居田郁夫

マンガ 橋本 巖

さしえ 鳥井 禎子

カット 林 慶子



ここにもいたすばらしい夫族

山本健二さん

(全日本国立医療労組本部書記)



十年前発表された乾孝氏の「新しい育児」の切抜きを、山本さんは大切に保存している。

山本さんは、第一線に働く看護婦の夫として、父親も育児に責任があるとする乾氏の理念を、身をもって生きてきたのだった。

育児から解放されたい、氏は「看護婦のオヤジの会」を作って、妻たちの労働軽減のために、余暇を捧げている。

よりよい明日を築くために、と語る山本さんの笑顔はやさしい。

―家事は女のもの?―

最初は「やらざるを得ないから」で出発しました。わいふの夜勤が週四日もあるとオムツがどんだんたまる。僕は生れて始めてその時洗濯を手がけたんですが、夜中の寒い時ゴシゴシ洗うのはまだいいとして、朝、それを干す時人に見られるのが恥かしくてね。それと、赤ん坊を昼間預かってくれる近所のおばあさんの家まで乳母車で送り迎える時、なんか振り返って見られるんです。女の人に多いんですけど……

「ナニ、これしかないんだ」と最初は気負いでね。七人兄妹、上二人が男であとは女。男は一切家事をやる必要がない普通の環境で育ったから、古さからの脱却が大変でした。僕らの世代までは家事は女のものと思い込んでいましたからね。

わいふは一生仕事を続けたい、続けるべきだという意見を持っていたし、僕も女性が社会的に働くのを当然と思っていたので、わいふの意志を尊重しようと思った。だけど理屈でなく、たまっていくオムツを見てそのままにしておくなんて考えられなかったのです。

―女の役割意識―

共働きはたいして最初はいくついても子どもが生れると駄目になってしまふ。どんなに女の側が信念を持って頑張っても、夫も続けさせてやりたいと思っても、夫が家事に積極的に手を下さない限り、奥さんは疲れて参ってしまふ

自分から仕事を止めちゃうんですね。その意味で僕はわいふの割り切り方に感服してるんです。心の中では、僕にすまいと思っただけかも知れないけど、口に出さなかった点が、ちょっとおのろけみたいだけど、素晴らしいと思うんです。

例えば、家事は誰でもイヤだけど、食事の後片付けが一番イヤなんです。茶わんの尻までうまく洗えない。ところが僕が五、六年続けて、洗いが苦でなくなってきた頃、わいふがひとこといったことがある。「それを云えば、おとうちゃんがイヤになるだろうから自分でやれる時そっと綺麗にしておいた」って。

わいふが口うるさくあつた、こうだと指示しなかったことは協力者を作る一つのやり方だなア。

―僕が作ればいい―

週二度は徹夜の夜勤、朝帰宅して昼寝るのが看護婦の生活だから、夕方僕が帰ってくるとまだわいふが寝てる時がある。最初はやっぱりガッカリした。だけど次第に夜勤のつらさが分つてきて、わいふが寝ていようといまいと、文句云わないように自分で自分に仕向けたんですね。寝ていたければ、いくら寝ていてもいい……僕が夕飯作ればいいんだから――

―育児は母親だけのもの?―

子どもが風邪をひいたりすると、わいふが勤務を休むと他の人に迷惑がかかるので、僕の方

が年休をとって子どもの看病をした。はしかの時は半々ぐらい休みをとりましたかね。

小学校や保育園の保護者会にも、年休をとって出来るだけ出るようにしていましたが、出席するといつも男は僕一人なんです。最初は恥しかったけど、云いたい事は云うようにしてたらいつの間にか会長なんかにさせられていた。新宿保育園問題協議会なんかに出てもやっぱり男は一人か二人。PTAや保育ってものが、お母さんだけの仕事になっていることを思い知らされました。どんなに忙しいオヤジでも、人の父としての社会的責任を忘れていい筈はないと思うんです。

―可哀そうな子?―

長女が三つになって私立保育園にやっと思いで入れた頃、僕は夜の会議もあるし、わいふも看護婦やりながら組合活動していたので、帰りが六時半頃になる。他の子はみな遅くとも五時前後に迎えがくるのを知っているから、アタフタとタクシーで迎えにかけつける。この期間

は時間を金で買って夢中でしたね。

今頃になって高一になった娘がボツンと云った。

「保育園で一番遅くまで一人で残されてた時淋しかったヨ」

世の主婦の方が聞いたら、あわれな!と思うでしょうね。

だけど娘は「人が働き続けることの大事さを、

自分の親を見てわかった」と云うんです。僕らは、子どもが何になろうと自由だと思ってるのですが、娘は保母になることを相当現実性のある一生の仕事として考えているようですね。

―家事はやはり苦手―

娘は六才下の弟の面倒を実によく見ます。男の子の方は家事協力の点ではあんまりしませんね。だけど僕が台所に立つのを見てから、面白そうだとのぞきにくる。そんな時はその都度丁寧に教えるようにしているんです。

それにしても家の中の仕事で苦にならないのは掃除ぐらい、洗濯も洗濯機を買ってからは、マアマアになったけど、料理はねえ。考えなければなりませんからね。時間と気持のゆとりのある時は、材料をいろいろ買って作ったりするけど、面倒な時の方が多いです。

子どもの時からの訓練がより多いのでしょうか、わいふは手早いんですね。僕が一番手こずる油ものでも何の苦もなくサッと仕末してしまうのが不思議です。

―今が一番楽しい―

育児に手がからなくなった時、解放されるんですね。今、ものすごく自由時間が増えて来てるって感じます。わいふもそうですがやっぱり二人で子どもたちを苦労して育ててきたおかしみみたいなものですね。

解放された時間を有効に使おうと、「看護婦のおやじの会」を昨年二月に作りました。

看護婦の夜勤の多さから、家族生活がいろいろの影響を受けることを皆さんに知ってもらいたかった。一日でも夜勤がへればと思いますね。僕らの世代まで普通は働き続けられなかったが、二十代三十代の共働きしている人たちは、確実にふえてきています。

この会の他にも、僕の妹の一人が身障で施設に入っているので、施設の改善に役立つと、九十人位の会を作ったんです。いわば、自分にかかわり合いのあるサークル活動に時間を使えるようになったわけです。

育児の最中は考えられなかった事ですね。月一回、身障の妹に面会に行くだけが精一杯でしたからね。

ー今日一日に全力をー

二人とも、世の中は今より悪くならず良くなって行くだろうと思っているから、あんまり今後のことを悩むより、今日一日改善していくことにそれぞれ力を尽していれば、必ず将来世の中が良くなっていくことにつながるだろうって、子どもらが独立して老夫婦だけになったら、僕は、暮が好きたから暮会所でもやるかって冗談に話しているんです。(まとめ 林)

X X X X X X

・会員のみなさんへ。この欄にふさわしい共働きのカッパルをご存知でしたら、ぜひご推薦いただきたいと思ひます。ご一報下さい。

新しい育児

乾 孝(心理学者)

いまの子供たちの不幸のひとつは、大部分が「片親保育」の下におかれているということです。片親がいけないわけではありません。

「たゞいま留守中」なのでもありません。同じ部屋の中に、ちゃんとオトウチャンもいるのだけれど、育児はカーチャンの仕事だということでなるべく夕刊をビョーブに逃けているわけです。

それでは、安心してまかされる保育所、学校、さらに児童館なんでもができたらず子供は救われるでしょうか。わたしはあぶないもんだと思います。

オトウチャンたちの姿勢がいまのままだったら、やっぱり、子供のため政策も施設も動きはしないでしょう。

「お前のシツケが悪いんだ」といって横を向くと同じやり方で、不平は言っても子どもとの問題なんか、まともにふりかえて見ることはないだろうと思われるからです。

すいぶん筋の通った歴史観を持っている進歩的労働者でも、とかく「子供こそがその歴史の焦点なんだ」ということは忘れがちなのはなぜでしょう。

おそらく「男の子らしく」育ててくれたお袋さんの苦労の成果(?)であり、そして又現在の「良妻」たちの甘やかしのせいなんだ

と思います。

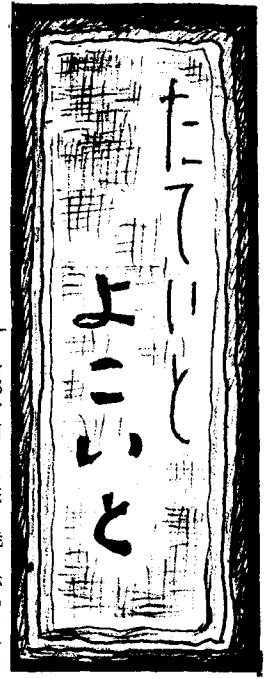
「育児、しつけ」の欄は主婦だけが読むものという「常識」は「人づくり」に全面協力中の商業誌にまかせておこうではありませんか。

彼等は「子供は子供らしく」「娘は娘らしく」そして「主婦は主婦らしく」家を守って社会のことなどについての発言はせず、亭主は「亭主らしく」かつ「善良なツトメ人らしく」と与えられた仕事のことだけに専念キリキリ舞いしているようにという理想のもとに、「人づくり」をすすめるようとしています。

ほんとの生きた人間を形成する場所が、夫婦を単位とする家庭であるのならどんなオトウチャンも、身分としての「家長」でなく、人間の父としての社会的責任を忘れていいはずはないでしょう。だから「育児」の第一課は、子どもの離乳食のコン立てではないのです。そこで、この子をどんな人にしたいかという点についての意思統一をはかることから始めなければなりません。

叩くか叩かぬかとか、テレビを見せるかどうかということは二の次の問題なのです。だからとりあえずお宅でも、この小文をサカナにして「育児」という営みの歴史的社会的意義についての父母会議を試みてくださるよう提案する次第です。

(一九六六年一月六日発行日医労協新聞掲載)



父



板橋区

上園めぐみ

夜更けて一人でわいふ第一三八号「特集天皇とわたしたち」を読む。戦争体験のない私も「遺児」という戦争の犠牲者、布団にもぐってからあれを思い出して、これをおもい、ついには枕にポトポトという次第になりました。初めて手にしたわいふが「特集天皇とわたしたち」というのも何かの縁、天皇の名のもとに天折した私の記憶にない父を書かせていただきます。一昨年末、実家が類焼で全焼したという突然の知らせにあわてて

帰郷、何日も続く焼け跡の片付けにくたくたでした。仮住いの借家に運ばれた焼け残りのくす類の中に確かに見覚えのある緑色の手さげ金庫、外は焼けたたれていますが、中身は、夢中で開けてみると中はどこから入ったのか水びたしでした。父の卒業証書、成績票、出征の前夜書いたという遺書、戦場からの便り、戦友からの父の死亡通知、それらがみな水でべっとりとくっついていきます。それから長い時間かかって、それらの字がにじまない様に一枚一枚丁寧に剝がしてホームコタツの中へ入れてかわかしました。私はそれまで母が大切にこの金庫の中にしまっていた事は知ってはいても、自分で開けてみた事はありませんでした。太い力強い父の字が、遺品として帰って来た幼ない兄と私の写

真が、ひとつひとつ私の胸を刺し、こうしてしばらく忘れ去っていた「父」が家族皆の中に甦りました。父は、昭和二十年三月、四才の兄、二才の私、そしてまだ母のお腹の中の妹を残し、生徒達の万歳に送られ出征しました。入隊四日目にはすでに敗戦の色濃い満洲へ「新兵さんは可哀想だね又寝て泣くのかよ」の二等兵の新兵、どのような毎日でしたでしょう。ソ連国境で激戦したこと、食べるものもなく一匹の猫を追いかけたこと、そして敗戦後は強制労働をさせられたこと、これらが聞き覚えの戦地での父です。どんなに強健な者でも持堪えられない様な日々で、もともと丈夫でもない父が病む身となったのも当り前のことでしょう。擬似赤痢で収容所へ。そこは薬も、看てくれる人も、設備らしきものも何もなく、激痛の中で唯死を待つ人々がひしめいていたとか、さながら地獄絵図であったのでしょう。どの方でもどんなに家族の待つ日本へ帰りたいと願われたことでしょうか。

「おそろくあそこから生きて帰れ

たのは私一人でしょう」と言われる戦友のお一人が、当時の様様を話しにはるる来られ、結局私達幼ない子供達が眠るのを待って話してお帰りになりました。

昔、母はまた時々夢で父と会う事があったのでしよう、「お父さんの夢をみた事がある？」と三人の子供に尋ねました。「ない」、「ない」、「会った事もない人の夢なんかみるはずないでしょう」。当然の返答でした。

小学校入学前でも母と一緒に出勤していた妹が、会社の男の人をつかまえては「お父さんになって」と言っ母をあわてさせたこと、母が「今日お父さんの夢をみてね、丁度あんたがいたのこの子が○よと言ったらふーんと言っただけで見もしなかったよ」と話してからは決してお父さんとは言わなくなった妹、学校であまり先生が戦争の話をするのでわざと泣いてやめさせた私、片親育ちの私達にはまだまだ色々なことがありました。

でも今までは常日頃は忘れていて時折もし生きていくれたらと

思う父であっても、正直なところそれは全て自分の為でした。自分が父の年令になり、子供を持って初めて、当時の父母の苦しみも少しは理解出来る様になりました。

父は父自身の為にもっと長生きして、只一度の人生を思う存分過ぎて欲しかったと思うのです。三十三才、教員、技術者、そしてまだ勉学の途中であったという父、趣味で作っていたという家具類には、どれにも必ず昭和〇年〇月〇日〇〇作と手書きしてありました。

私より年上の飯台、洋服ダンス、鏡台、置物、油絵等実家に帰れば会えたこれらの、火事で皆灰になってしまいました。「お母さんが古くなってもいつまでも捨てずに大切に持っているから、もういいよということなのよ」母には言ってはみたものの、今度買い揃えてあった新しい家具には、どんなに高価でも立派ではあるが何とも味わいがありません。

幸い手さげ金庫の中で焼けずに残った、父の戦場からの何通かの葉書の中に、五才の兄宛の絵葉書がありました。読める様にひらが

なで綴った文章に、どうだきれひだらうめぐみにもみせておやり、と書いてあり、初めて父の中にあつた自分を見つけた私を、今の恵まれた環境の中の二人の子供には理解出来ないことでしょう。いやいつかゆっくりでいいから色々話して聞かせなければ……

「お父さん」「お父さん」何度呼んでも返事をしない夫に「おい、おとう」とどなる六才の息子、「ふん」、ようやく本から顔をあげる夫、目的があつて寸暇をみつければ、例え国の為、いかなるもののためにも決してちぎりと取られてはなりません。大切な「父」の一人としても。

おいくつになられても「戦争責任は？」と問われるお気の毒な天皇、「お父さんの写真はかざらないの、お子さんですか？って聞かれるから」と言う六十四才になる母、そして戦争であらゆる辛酸をなめてこられた多くの方々が、亡くなられた数多くの方々の分まで、

健康で、幸福で、長命でと心から祈ってペンをおかせていただきました。

はじめに



横浜市

井上桂子

私にとって、書くということはどういうことなのか——「わいふ」に何か原稿を、と考えているうちふと、そんなことを思った。

昨年夏から突然のように体の調子が悪くなり、この半年というもの、ほとんどペンをとるとか、ものを考えるということがなかった。考えるといえは、体のことか、それにまつわること、すなわち、もし私が死んだらどうなるとか、子供がどうなるとかいうふうな、暗いことばかりであった。死という恐怖の極限であるイメージについて考察するなどという呑気なものではなく、いつ死ぬかも知れないという切迫した、極めて実際的な

雑念ばかりが、私を苦しめた。

といっても私は世間でいう大病を患ったわけでもなく、難病にかかったわけでもない。自律神経失調症という、医者仲間では病気というには名ばかりのものであるらしいが、突然に襲ってくる動悸や息苦しさ、めまい、けいれんなどに遭遇すると、本人はその瞬間、常に死と直面しているわけである。そして、いくら神経症といわれても信じられず、心臓病か、それであれば脳腫瘍とかと、自分の病気を後生大事にたてまつっている。あけくの果てに、片時も一人でいられなかったり、密室がこわくなくなったり、刃物がこわくなったり、ほんとのノイローゼ症状をきたすのである。そうして半年たつうちに、いくらか症状がやわらいでできた。すると、死というものに対して、やや冷静に考えられるようになった。

人生は死への準備だ、ということはずっと以前に聞いた言葉である。本来は「哲学は死への準備なり」という、ある高名な哲学者の言葉だったのが、あれこれ議論す

るうちにそういうことになった。生きるということは死ぬための準備なのだ。人は死ぬために生きるのだ。もっといえば、よりよい死を死ぬために、人はよりよい生を生きようとするのだ、ということ。若い頃は——いや、今も若いのだから、厳密には、もっと若い頃は、とてべきだろう——この世のすべてを死から出発して考えるべきだと思っていた。死を考えずして生を考えることなどできはしない。多くの人たちはそれに気づかないで、ただ空しくその日その日を享樂的にすごしているにすぎないのだなどと、幼い感傷的な怒りを抱いていた。そして死から出発するとすべて空しいという締結から逃れられないでいたが、本当はそうではなくて、死があるからこそ生は空しくないのである。ところが年と共にわかるようになった。人より幼かった私もそういう年になったのだというべきかも知れない。しかし、それも又真実味をとまね観念の遊びでしかなかった、ということが今度の病気でわかった。

なぜなら、今死んでは困るからである。今死んだらあまりにも多くの煩惱のために成仏できずにいつまでもいつまでも墓石のまわりをふらついているなければならないからだろう。

いつ死が訪れても悔いがない生き方をする、それができればそれ以上の生はあるまい。そんなことができるはずがない。そうかといつて、できるはずがないと居直っているだけならノイローゼにおちいるのがオチである。そこで、できるはずがないと居直ったところから私の書くという活動が始まるのだと考えたら、何となく落ち着いた。

双児の育児にあけられて三年余、気がつくとも三十代に足を踏み入れていた。できれば再就職を、と希んでも、ひとたび幼い者を道づれに歩み始めた人生をそうやすやすと変えられるべくもない。主婦としての仕事を決して熱心にやる方ではないが、プロとしてそれに徹するならば、なまじそちらに転がっている女性の職業よりも、はるかにやりがいのある仕事だと私は考えている。子供を育てるということ一つをとりあげてみると、それは生活であると同時に教育であり、哲学であり、芸術であり、創造であるのだ。しかし、主婦としての仕事は家庭というあまりにも曖昧で安易な状況の中にしかあり得ないためにつかみどころがなく、時にむなしさばかりが拡大してみえるのだ。

ものを書くということとは、いつ死んでも悔いがない生き方などできるはずもないつかみどころのないむなしさばかりを抱きかかえてうろろろしている女にとって、何という安心のできる逃げ場だろう。否、その逃げ場にはもしかしら抜け道があるかも知れないのだ。たとえこの世に大異変が起って、天涯孤独の身になったとしても、一本のペンと一枚の紙片があれば、ゆったりと笑っていられる、そんな強さがその抜け道のずつと先にはあるかも知れぬ。その上、同道の友の一人もできればうれしい。

そんなことを考えて、ささやか

な感傷にひたっている最近の私である。

樋口先生のこと



大津市

中野桂子

ことし、二月六日、二年ぶりで樋口恵子先生にお会いした。わが市の主催する「市民教養大学」の講師として、ご来津いただいたわけ。

国際婦人年であった七五年中、更に名を馳せあらゆる方面で活躍されたことは周知のとおりである。著書「私の青春日記」(ポプラ社)は、私の娘も「何度も読みたい」といつている、中・高生にとってまたとないプレゼント。無駄のない話しかたと、やさしい雰囲気は私は好きである。そして同じ年頃の娘をもつ母親であるという唯一の共通点で、あつかましくも親近感を抱いてしまう。

先生との出会いは、ある年のあ

る日、全国規模のある集會に参加するといふ、立場こそちがえ、同一目的をもつて東北本線の座席に偶然隣り合せて座つたことにはじまる。私はその頃（S四七年）市の社会教育課で、団体指導を主とする「婦人教育」を担当していた。文部省の配下に属する職場であつたから、労働省の主催する婦人週間行事である「全国婦人會議」が、毎年開催されていることにその年まで殆ど無関心であつた。その會議に参加するためには決められた「主題」に対しての意見、感想文の提出、都道府県・婦人少年室を経ての「審査」、を通過するといふことが条件であつた。おおよそ、「かく」といふことに長年興味を持たなかつた私が、何となく「かいてみよう」と寝床の中で作文したもの、何のことが資格を得てしまつて、會議の開催地「仙台」へ赴くことになつた。先生については、お名前を知る程度であり、労働省から送付された関係文書によつて、私の属する部會の助言者であることを知り拝顔の榮に浴せると思つてゐた。

上野駅一〇時発の東北本線の発車までの間、隣席が空席であつた。氣安さから、缶ビールを仕入れて喉をうるおすなど横着なことをやつてゐたのだが、発車間際になつて隣席を占められたのが、後ほど判明した先生だつたのだ。軽く会釈された時、知的ななかりにやさしい人だと思つた。そして列車が発車してしばらくすると先生は眠つてしまつて、私は長時間押されっぱなしになつた。正午すぎ食堂車へ行くべく、ちよつと身を引いた。氣付かれた先生を尻目に私は席を立つた。それまでの間に「きつ」とこの人も仙台の會合に行く人だ」と感じていたし、投稿者レベルではないことも感じていた。食堂車で自分の想像をつめて行つて「樋口恵子氏かも」と思うに到つた時、先生がご入来になり、俄然あるコーナ―にいた人たちが「あつ、先生」と云つて迎えたことで「矢張り」と



いうことになつた。でも私は、座席にもどり、そのあと先生がもどられても、話しかけることはしなかつた。「いずれ後ほど。」と雑誌をひろげて缶ビールを飲んでゐた（後で先生から、学校の先生かと思つてゐたといわれたが）。列

車が仙台駅へ着いた時、「お先に」と先生はさつさと下車され、私はゆつくり後から下車した。部會での自己紹介で、私が「実は先ほど東北本線で」と云ひかけたら「あれつ」と先生はおっしゃつた。そのあと、私が枕にな

つたことにお詫びを云われて恐縮した。昭和四八年三月、市の婦人大会に先生をお招きして「現代社会と婦人の役割」についてお話をしていただいた。そしてまた投稿した感想文が入選してしまつて、その年は福岡で、三度目お会いすることになつた。昭和四九年は、投稿をやめて、かきそふな人をつかまえては、投稿をすすめたが、その年のくれ、公民館職員研修會にご来津いただいた以来、ことしまでお会いする機會はなかつた。その間私は「網膜剝離」などというとてもない大病にかかり、聴覚のみの世界で三ヶ月を過すなど脱社會となつていたりしたこともあつて、先生との大きな距離を感じてゐた。病後はじめて読むことのできた、はつなつのある日、「婦人年の意見募集」をみつけ、ひまだからかいてみようと思つた。現実にはなれした観念的なものだったのに、また入選してしまつた。そのとき、毎回お会いした先生のことを思い出したけれど、国際婦人年の舞台は手のとどかないところに

あったし、私自身まともに仕事もできず保身のみにあけくれ、新年を迎えてしまった。

さて、お久しぶりの先生を京都駅までお迎えに行き、僅かの時間ご一緒した時、新「わいふ」で私の名前をみつけた——とおっしゃったのでびっくりしてしまった。

(和田様とお知合いのこと)

我が家にはふたりの娘が存在することから、先生との関わりあい「無音」といえど今後末長く続いていくであろうことを思い、私は先生の存在に交えられていることを、しみじみうれしく思う。

海よ



新座市

立野匡子

美しき桜貝一つ……私は好きなこの歌を口ずさみながら伊豆の海岸に立って打ち寄せる波をみていた。この雄大な海の一部が絵になるのかしらと心細くなってい

た。

三年前からはじめた日本画の会の友人数人との旅である。張り切って出掛けてきたのにああ、どうしよう岩は波に洗われて濡れている。岩に砕ける白い波は海鳴りと共に自然の厳しさをみせている。

何か描かなくてはと場所を探しスケッチを始める、快晴ではないので雲の切れ間から陽光が一筋海面を照らした。さざ波にきらきらと映る陽は美しい。水平線はあまりはっきりしない。遠くの島影が霞んでみえる。

友人は勝手に場所を探して美事な絵を描いている。岩の上には釣り人がのんきそうに釣り糸をたれている。三時間あまりして二枚の絵が何とか描けた。

昨年の七月、私は友人と伊豆の海にいた。矢張りスケッチ旅行のつもりがついに収獲なく、のんきに涼しい海風に吹かれながら海岸を歩いた。

その時、防波堤のわきに真赤なカンナの花が咲くのをみて、これを描きたいと暮れゆく海をみながら二十号のパネルを心に描いた。

かたわらにはのかに咲くはまゆうをみた。

長かった日も暮れ、山の端に日は落ちた。

私は海のない土地に育ったせい、か海が好き、何時の日かきっと風景画を描いてみたいと心にきめた。

二月の海風は冷たい。コートのを立てマフラーを風になびかせながら足元に気をつけながら少しづつ満ちてくる海岸を歩いた。

再び来たい海よ。

パリの秋

東京都

田中喜美子



「この街の人たちがぼくたちよりも悲しそうな顔つきをしているのは、そりゃ君、寒い国だからさ」南欧のひとに聞かされた、パリの「悲しさ」を、昨秋の旅で私はじめて知った。

「さらば、束の間の夏の潑刺たる明るさよ」の詩句のあと、秋の暗さ、冷たさを唱うボードレール

の「秋の歌」のメランコリーは、秋といえは、一年のうちいちばん健康的な、抜けるような青空ときんらんたる陽光に恵まれた、なつかしい暖かさを想いおこす、われわれ日本人の感覚には、受け入れたいものがある。

パリの秋は、寒く、暗く、冷かった。

十月ははじめというのに、気温が五度まで下がるという異常天候のせいもあったが、毎日、雲がたかく張りつめて、気の滅入るようなどんよりした薄暗さがつく。

その雲が、ふっと切れたかと思うと薄日がさし、さしたかと思うとそれも束の間で、又してもハラハラと雨が落ちかかる。時雨というには悲しすぎた。

そのかわり、雲の切れ目に夕陽がさし、青空がのぞくとき、その空の、はかなくたよりないまでに薄いブルーには、日本の青空の濃い青にはない、情緒がただよう。シスレーの空の色である。

その空の下を、パリのひとひとは、眼差は冷たく、口もとをひきしめて、足ばやに歩いていく。

食品添加物のはなし

青木やよひ

私が無添加食品を心がけるようになってからもう十年以上経つ。

ヨガをはじめてからでも今年で四年になる。そんな私が話をするとき、以前は「なんて神経質な」とか「なんてモノ好きな」とかいった顔をされたものだが、この頃は反応がすい分ちがってきだ。

「玄米はどこで手に入るんですか」「ヨガはどこで教えてくれますか」などと尋ねる人が多くなったし、少なくとも変わり者扱いすることはなくなった。そして、加工食品には添加物の表示が義務づけられ、「一切無添加」というのが商品のメリットとして打ち出されるようになった。

十年前から見れば進歩といえるのだろうか、しかし、最近野菜や果物の汚染がひどくなっているし、これだけではどうも事は解決しないような気がする。

なぜ、私がこんなことを始めたのか、そのいきさつを少しばかり書き綴ってみようと思う。

うちの亭主というのは、中肉中背の標準的体型で、最近ではヨガのせいでややターザンのスタイルになっている。

めったに病気をせず、スタミナがあり、大変な医者きらい薬きらいである。ただかつては季節の変わり目に軽い喘息症状があり、今でもじんま

しんが人より出やすいから一種のアレルギー性体質といえるかもしれない。その彼が、タラコにはじまって、何を食べてもじんましんが出るという症状に苦しみはじめたのは、もう十二、三年前になるだろうか。

医者に行くときロクに症状も聞かずに抗ヒスタミン製剤をくれるが、これはご存知のように眠けをもよおす。こんなものに頼っていたのではとても仕事にならないので、イヤがるのをなだめすかして、私は彼を人間ドックに入れた。

ところが結果は、どこにも異常なし、どの項目も全部「A」である。それにもかかわらず病院に入っている間じゅう、家にいた時よりもひどいじんましんに悩まされた。だいたい彼のじんましんというのは、ちょっとボツボツが出てかゆくなる、などという生やさしいものではない。十円玉ぐらいが、腰のまわりや二の腕などの体のやわらかい部分に重なり合って発生して、ケロイドのようになり、たいいてい吐き気をとまってくる。これを医者に訴えたと、とどのつまり外科に廻わされて、軟膏状のつけぐすりを与えられて、それでおしまいになった。

彼は憤慨し、私はがっかりした。

しかし、体に異常がない以上、原因が食べ物にあることははっきりした。それまでも、じんましんは動物性蛋白の摂取に関係があるという考

えに従って、肉や生魚などは避けるようにしていたが、ちょうどその頃近くに出来たスーパー・マーケットを利用して、紀文のチクワやカマボコなどといったあっさりしたもの、それに栄養価が高いといわれる豆腐などを食膳に出すようにしてみた。ところが全然効果がない。

そんなある日、教え子の結婚式か何かで帝国ホテルのフルコースの食事に招待された。「エイ、ママヨ」と食べてしまった生焼のビーフ・ステーキが、どういうわけかなんともなかったというのだ。

「あなたのじんましんで、ゼイタク病じゃないの」などといやみを言ってみたが、私はその頃から加工食品に疑いを持ち出した。

豆腐の場合は特に症状がひどいので、これもなんだか原因がわからないままに、うちでは禁止品目になった。

そうしているうちに、食品添加物の害を教えてくれる書物に出合うようになり、豆腐のA F 2問題が専門家から指摘されるようになった。

さんさん苦労して、暗中模索しながら、試行錯誤をくり返したあとだけに「そうだったのか!」という思いは強く、「厚生省は何をしているのか」と、亭主ともども憤然とした様子は御想像いただけることと思う。

*

以上のことから私たちが学んだのは、一つはいわゆる近代医学の限界である。機械や薬品に検査させて、それで異常がなければ患者が何を訴えようととりあわず、つけ薬のような対症療法しかやらない。

肝心の人間の肉体が発している信号を解読しようという努力がまったくないのである。

極論すれば肉体をモノとしか考えない、せいぜい精密機械ぐらいにしか思わないということだろう。

二つ目には、厚生省は私たち国民の健康を責任をもって守ってくれるわけではない、ということだった。私の老母などは、私が当時三六〇種以上あった法定添加物について厚生省の非をならすと、「まさかねえ、立派なお役所のやることだもの。毒のものなんか許可するわけがない」

となかなか信じなかったものである。

最近私の意見に賛意を示すようになったが、それでもまだ、法律で決まっていることへの信頼度は高い。

三つ目に学んだことは、添加物文化はスーパーマーケットの普及と共ににはじまったということである。

もちろんこれは後から気づいたことだが、細ぼそと営業していた近所の豆腐やさんから、その日に作った製品をその日に買っていた時分にはじんましんなど出なかった。

高度成長政策と共に食品もまた大量生産・大量消費時代に入り、複雑な流通機構を通過して末端のマーケットに出る。現在は鮮魚でさえも、海から上って家庭の食卓に出るまでに三日はかかる仕組みだというから、他の加工食品は推して知るべしである。(魚の場合、少なくとも三ヶ所の卸売市場を通り、そのたびに手数料をとられ、だいたい原価の三倍になるという。)それだけの期間、日もちがするようにと使われはじめたのが、合成保存料であり、酸化防止剤であり、見た目をごまかすための合成着色料なのである。つまりこれらは消費者側の必要からではなく、メーカー側の都合と利潤の多い流通機構を維持するための経済的要請から生まれたのである。

*

私たちの場合、気づいた時期が早すぎて周りの人たちの共感をえられず、まずわが身を守るしか方法がなかったけれど、これは本来自分だけなんとかすればすむという問題ではない。

たとえ家庭内だけで気をつけても、子どもがいれば給食というどうにもならない現実があるし、入院、旅行、外食、会合と、人間の社会的行動には食事というものが絶えずつきまといっている。

そうやって体内にとりこんだデヒドロ酢酸や亜硝酸ソーダが十年、二十年先にどのような形で体に異常をおこさせるか、誰にもわかっていないのである。

添加物文化がはじまって現在十五年近くなるが、原因不明の難病や、病気ではないが健康感を持ってない人や、ガンや心不全などの成人病が最近急激に増えている。先天性異常児の出産も多くなっていると、専門家は再三警告を発している。

私は、機会のある度に、このことを言ったり書いたりして少しでも世論喚起に役立ちたいと思っている。

しかし、私たち自身の側にも、これまで、自分の生活をいかに合理的に能率よくするかと、物質的利便さばかり追い求めてきたことに對して根元的な反省がなければならぬと思う。

私は自分が、文化的向上には熱心だったけれど、自分の体やそれを養う食べ物や、たとえ粗末に扱っていたことかと思う。

ステレオには大金を惜しまないのに、十円安い大根を買おうとあくせくしていた。自分でさやかなんかを耕してみても、この考えは逆転させなければならぬと思うようになった。

人間にとって本当の豊かさとはなんなのか、私たち一人一人がそれを問いかえさぬかぎり、食品汚染の根を絶つことなどとうていではしないと考えている。

(評論家)

食品情報



カロチン玉子

「わいふ」の会員の鈴木保子さんから頂いた玉子、固いカラを割って驚いた。くるとまんまるに盛りあがった黄味が黄色と云うよりオレンジ色に近い。近頃は、白っぽい黄味、柔かいカラの玉子はかりだが、以前はこれが普通の玉子だったのかも知れない。

この玉子の製造発売元は藤井物産。社長の藤井勇三氏はもと高校の理科教師。昭和四十年から「人のやらない仕事」と玉子づくりに取り組み、現在も社長兼運転手で毎日配達に深夜までとびまわっている。

従来、鶏のエサには一般にアルファミールという牧草が原料の飼料に用いられているが、これではカロチン不足。そこで、トウモロコシ、カボチャ、緑草等カロチンを多く含む有色野菜と、更にこれに動物性カロチン(甲殻類)を配合することによりこの玉子を誕生させたと云う。

WHOと農林省の認定、東京都衛生試験も合格、栄養は保証されているそうだ。

鮮度を保つために、産地から関東一円に四十八時間以内で直接配達、今は二十四時間を目指しているとのこと。

価格は、私が購入した二月十日、一箇二十三円、近所の酒屋では二十六円だった。購入単位は約百五十箇入一箱が十ケース。まとめてお買いになりた方にて紹介します。(H)

安全な冷凍焼くわ

魚の練り製品は、もちがよくないためか、合成殺菌料、保存料を加え、その上着色料まで入っていたりして、どうも常用するにはうす気味わるい感じがします。しかし高物価のおりから、たいへん安い蛋白源ですので安全に利用できればたすかりますね。

青森県青森市に、沼田商店という焼くわ、ハムなどの製造所があり、ここから冷凍焼くわが全国に出まわっています。一本五十円前後のお安いものですが、日本食品センターの分析結果は左の如くで、危険なものはいないようです。冷凍して出荷し、半分凍ったままスーパなどで売られますので、防腐剤の必要がないのでしよう。沼田商店の話では、販売範囲は関東以西、主力は東京薬地市場ということですが、大阪、京都、名古屋、和歌山、長野、神奈川、埼玉等にも販売されているよし。私もではつねづね買い置いています。おでん、煮付などにして愛用しています。子どもむきにはてんぷらにもよろしいです。沼田商店製と書いてありますから、たしかめてお求め下さい。

(W)

水分	65.33%
たんぱく質	10.79%
脂質	3.23%
(酸分解法)	
繊維	0%
灰分	2.90%
糖分	17.75%
100g当りのカロリー	143Cal
カルシウム	117mg%
サツカリン	検出せず
ナトリウム	
ソルビン酸	検出せず

「女性は脳が小さく知力も劣り、感情的で動揺がはげしく、弱く病気がちな生物で、判断力というものにはほとんど無縁で分別がなく、外でできる仕事といえは決まりきった単純な作業に限られている。」これは十九世紀西欧の女性観だが、東洋ではその上、女は道徳的にも低級な動物とされている。

「女子と小人は養いがた」いのだし、「女の窩ったような」といえば最大の悪口だ。私たちは知らずしらずの間に、女についてのさまざまな先入観を植えつけられてはいないだろうか。

アメリカの人類学者、A・モンタギューのこの著書は、科学的論拠にたつて、それらの偏見をもののみごとくにうち破っている。

力による社会支配の時代には、体が大きく筋肉が強い男性は、すぐれた性とされていたけれど、死亡率、病気からの快復力、男性だけがかる病気、飢餓、疲労、ショックなどに耐える力、すべて生物学的に女の方がすぐれている。

その上、脳の重さと知能とはまったく関係のないことが科学的に立証されている。実際に、知能テストにおいてはほとんどの場合女性の方がすぐれている。

それなら女性はずなせ、学問、芸術、政治経済の面で男ほどの業績をあげられないのだろうか。モンタギューはその原因を、女性の生理の必然ではなく、母性の重荷を負った女性が、力による支配者である男性に隸属していたこれまでの社会のありかたに帰している。

女性が感情的、という点についてはどうだろう。女性の方が男性より感じやすいことはたしか。だが男性は、丁度固いスプリングを備えた車のように、早くガタがくる。統計は、男性のほうが感情的な緊張から破綻をきたしやすいくことをはっきり示している。

精神病者も、自殺者も、神経的



にまいる者も、男性のほうが多い。さらに空襲時の統計から、パニックに沈着に耐え、対処する力も、女の方が勝っていることがはっきりした。

一般に、女性が感情を制御できないように考えられている原因は、女がすぐ泣くからなのだが、これも先天的なものではない、と著者はいう。女が泣くのは、社会的に認められている行為だが、男は「男らしさ」の規範によって縛られている。そのかわり、男には怒ること、攻撃することが許されている。女が怒ったり、ましてや「罵る」ことはいけないのだ。

女は社会性に劣る、ととかく考えられているが、モンタギューはこの点に関しても、新しい視点を示している。愛とやさしさを原理として動く女性の、おだやかさ、親切さ、協調性と、男性の攻撃性、

破壊性とはどちらが真のいみで社会性に富んでいるか。よりよい人間関係をつくり上げるのを社会性というのなら、女のほうが社会性において勝っているのではないだろうか。

わたしたちが、心の底でひそかに感じていながら、女性に対する偏見に妨げられてはつきり意識することのなかった真実を、これほど客観的に示してくれた本は今までなかったように思われる。

しかしこの本の最大の特徴は、女性を論ずることがそのまま、タフで粗野で闘争的であることが男らしいとされてきたこれまでの社会に対する痛烈な文明批判となっている点にある。母性のあたたかさ、愛の輝きが、行動の原理となる社会、男女が平等に働き、力による抑圧のない社会を夢みる著者の理想は、はたして一笑に附し得るものであろうか。

いろいろなことを考えさせられる本である。

(T)

平凡社 千二百円



私のひとこと

練馬区

青木 知子

可愛い雑誌、楽しく興味深く読ませて頂きました。私は「わいふ」の今迄の事も知りませんし過去どんな内容のものであったかも全く知りませんが一三八号を見た限りでせんえつとは存じますが感じたままを書かせて頂きます。(中略)

一、編集、組みが何となく読みにくい感があります。企画と投稿の両立の企画は良いと思います。投稿なり企画の線をスタッフの編集会議できちんと決めるべきだと思います。何月号にはどんな線ととジャーナルの特集を組むのなら企画もそれに対しての投稿も何月何日迄にと前の号に発表し、その集まった原稿に対してもちんとした組をして行かなければと思います。でなければ「共に考える」事がほんの一部の主婦だけで大部分の方は読むだけの人になり、頭を使って考え、ペンを取って書き、自己を表現してみよう、積極的に「わいふ」の存在に参加して行こう、自分も一人なのだと言う意識の無い人々を相手に、ただスタッフがかかまわり疲れてしまう結果を恐れます。その為にも、もう少し紙面を多く、ゆとりを持たせ楽しく見られ

る誌に、会員も全国にとの事、ローカルな話題も又文芸的なものも投稿出来るようになったらと思います。その為にも会費は値上げしても良いと思います。

二、座談会は、あの発言でしたら「主婦と職業は両立して行かれるか」ではないでしょうか。あのテーマでしたら、もう少し、夫や子の気持の側にも立って考え発言して下さいねば酷！と思います。選ばれてその人の妻であり、その子供だけの母であると言う思いが忘れられているように感じました。どうして、夫と子がわいふのすべてであると思っていけないのですか？すべてであるからこそ、そこからすべての問題に様々に発展して行くのではないのでしょうか。

三、天皇に対する特集は皆様よくお調べになつて良くお書きになっていると感心させられました。私も戦中派ですが多くを知り、教えられました。記事を読んでいると天皇制に対し批判的にもなりますが、大きな気持で一億一千万のすべての人々がボイコットするのでなければ、国が存在して行かれるのなら、神話的に在ってもいいのではないかと思います。過ぎた事、そうあった事も忘れ、許し合えると云う事も生きて在るうちだけの事ではないでしょうか。(中略)

あるがままに、素直に、女だからこそ「わい

ふ」なのです。頭が良い人達の集り、問題に対し切れる発言の多さ、書ける人の集り、その様な「わいふ」には淋しい気がします。「わいふ」の価値を高め、暖かく見つめ、素朴でうるおいのある心の交流の場としての「わいふ」誌の存在を期待しています。

(私のプロフィール)

- ・戦中派・学徒動員で立川飛行機工場へ出勤して居りました。
- ・結婚二十二年、大学と高校生二児の母。
- ・随筆の同人誌を四年友人達と力を出し合い支え合ってやって来しました。
- ・七年程OLの経験あります。
- ・主人は平凡なサラリーマン、熱烈な恋愛結婚。
- ・健康を害しますので現在外出は出来ません。
- ・洋菓子、料理を来て下さる方にだけ指導しています。

●行きとどいたご意見、本当にありがとうございます。編集の技術的な問題、投稿募集のやりかたなど、青木さんとまったく同じ意見が編集部でもバッチリ出ています。139号では前号の欠点を改めたつもりですが、失敗して

みないと分らないのが素人の悲しさで、今後
も試行錯誤を続けそうですので、どうかど
んどご意見を寄せてください。

「わいふ」の投稿誌としての独自性を生か
すために、わたくしたちもないチエをしほ
っています。投稿は、原則としてぜんぶのせる
のが編集部の方針ですが、その他にも、いろ
いろな形で、読者参加のよさをよりこんでい
きたいと考えています。
(編集部)

世田谷区

橋本宏子

第一号を読ませていただき、周囲の主婦とも
話したのですが、なぜ今、「天皇制」を「わい
ふ」がとり上げなければならないのか、疑問だ
と思います。主婦が当面している問題、悩みは
他に沢山あると思うのです。天皇制も考えねば
ならぬことだけど、ここでこの様にとりあげる
と、その内容はともかくサロンの感じをうけま
す。

座談会は面白ございました。けれど、専業
主婦がなぜ夫の家事協力を必要とするか、よく
わかりません。たとえばどのように男の子を教育
し夫を訓練しても、主婦が家事専従者である限

り、分業が性的に確立している限り女は家事か
ら解放されなれないと思います。私はワイフとして
よりウーマンまた人間として女の人生を生きた
いとおもうし、きっとそういう主婦が多くなっ
ていると思います。この雑誌が従来の婦人雑誌
から脱皮しようとするならばワイフから脱出し
なければならぬのではないのでしょうか。私は
ワイフの自己告発のようなものでしたら興味あ
ります。

中年からの主婦や家事専業の主婦の生き方を
私もいまでも考えさせられています。(中略)

高宮みかさんへ。職業と家庭と両立できない
ように考えていらっしゃるようですが、現在の
社会のしくみができなくさせているのであって
両立できるようにするのが歴史の進歩の方向な
のではないのでしょうか。それを誰がしてくれる
か、待っていてもその時はこないのです、私たち
自身が困難と戦ってつくり出していくものです。
現にそれをやりつつある人たちはあなたのひと
まわり年上の婦人たちの間からはじまっています。
あなたのように断定してしまうことは、御
自身を肯定的に慰める自己弁護でしかないと思
います。私は職業をやめたことを敗北とはみま
せんが、多くの婦人たちが結婚後職場を去らね
ばならないようにできているいまの社会に怒り

を感じるものです。

そのような現社会の中で、専業主婦が果たす
役割を考え、子ばなれの先をどう生きるか、み
んなで考えるきっかけをつくってほしいと思
います。

―高宮さんのエッセイへの期待をこめて―

●東京での「わいふ」づくりの最初に、編集
部では、企画もののテーマは、これまでの
「わいふ」の投稿の内容からなるべく取り上
げよう、という方針を立てました。天皇制を
とりあげたのは、この方針に従ったことと、
天皇の記者会見を機会に、わたしたち女性の
多くが、まだまだその中からめ取られている
身分制度の頂点に立つ天皇というものを考
えてみたいと思ったからです。けれど力量不
足のため、テーマが十分に展開しきれず、女
の生活と天皇制とのつながりを十分に浮きぼ
りにできなかったことが残念です。

さて夫の家事協力の問題ですが、男が家庭
の中で働くことが習慣として身についてい
なければ、女が家事から解放されないのは、女
も男と同様に社会で働いているソ連の家庭の
実状をみてもわかります。専業主婦からの脱
皮をめざすのなら、尚更生活習慣の中で、ス





ムーズに男性が家事に協力できる体制を、日頃から整えておくべきではないかと思うのですが？ ワイフとは一体何なのか、女はワイフから脱出すべきなのか、橋本さんのおっしゃるような根本的問題は、これからせひ皆で考えていきたいと思っています。限られた紙面なのに、やりたいことは山ほどあって、もどかしい思いをしています。長い目で見て下さいませんか？

(編集部)

神戸市

小 椋 昌 子

三十五才の熱讀者である同一婦人団体の〇さんが「わいふ」を勧めて下さり、会費を御支払ひして、その会員として連なることが許されたのか、第一回目の「わいふ」が先日我が家に届けられた。一身上の都合により、六つの（わいふを入れて七つの）団体員となった私は、他の団体とは異なる眼でわいふを期待したのであった。今迄〇さんから三回程読ませていたいて、いいなあと卒直に思い、文章書くことから四、五年遠ざかっていたのかかわらず、常に書きたい、投稿したい、とプツプツと胸にためていたので、よし、文才の無い己の文章でもどっ

かりと載せてもらえるぞ！…〇さんも書かれるかしら、日さんも…そして、沢山の人々の文章が載っていて笑ったり、怒ったり考えたりできるんだなあ…と、第一回目のわいふに大変な期待をしたのだった…がその期待は裏切られた。どこかの婦人雑誌をまねたかのように「内助の夫」やら「座談会」やら登場し、今迄読ませていただいた他の三部とのへだたりに、ひどくガッカリしてしまったのだ。私事であるが、毎日二部の新聞の購読をし、週三部の新聞、月四部の雑誌を読破するべく努力をしている身において、この種の新聞、雑誌とは異なる「わいふ」を夢に描いたのだが…。しゃべることを（つまり、対談とか座談会）取材したりすることを重きにおく雑誌ではなく、書く、という行為により思考しうる人間にをめさす雑誌が、わいふにあってほしい、と切に望む次第である。

●小椋さんと同じ感想をお持ちの会員の方々も多いことと思います。旧「わいふ」にはかみしめればますます味の出るスルメ的なよさがありましたよね。

でも考えてもみて下さい。旧「わいふ」が、どうしてやっていけなくなったのかを。それと、前号のアピールでおしらせしたような

財政上の問題、これが138号が、企画と投稿の二本立てで発足した理由です。

これからの「わいふ」が、「書く、という行為により思考し得る人間をめさす雑誌」をつくるのは、まず第一に、投稿者のみなさんの力にかかっているのです。小椋さんも、ぜひどうぞ！

(編集部)

小金井市

矢 内 花 籠

東京「わいふ」第一号をお送りいただいて、その立派なのにまず驚きました。それは外観内容共々によくまあこんなと思うほど見ごたえのあるものでした。これが「わいふ」たちの文かと疑いたくなる程高度な論文に圧迫感さえ覚えました。考えてみれば学校の先生やそれに劣らぬ学力の必要な仕事をお持ちの方が大勢いらっしゃるのですから当然には違いないのですが、ちょうど年末の忙しい時期にこれ程のものを書かれた熱意にただただ頭のさがる思いです。割付けをなさった方が全くの未経験者だなんてほんとに信じられませんでした。

秋の天皇御訪米、はじめての記者会見等がありましたので特集に天皇制が組まれたと思いま

すが、改めてむづかしい問題だと考えさせられました。戦争責任をとる意味でもう少し以前に退位はあるべきだったと思いますし、今ではもうすぐにもという感じです。特集が終ってからというのはフェアプレイでないような気がしますのでよしますが、先日或る雑誌に、三笠宮寛仁親王がきき手、高松宮様が話し手、それに秩父宮妃、高松宮妃が参加されて皇族についての座談会がのせられているのを読み、わいふの読後ただただ大変興味深く感じました。その中で成程と思ったことは「私達は文化の伝承者だと思ふ」という言葉でした。高松宮妃は有栖川宮家から書の一流を受けつがれ、絶えるのは惜しいということで今常陸宮妃に伝えておられるそうで、そういう小さいものはさておいても考えてみればもし皇室がなくなっていたとしたらその保護下にあった、またはその存在に伴っていたさまざまなもの、有形無形の文化財が現在果して残っていたかどうか大変疑わしいものでしょう。特集の記者会見の感想の中で若い方が東京はせまいのだから皇居なんかもっと小さくして、と言っておられました、今の東京で大変貴重な緑がおかけに残っているというメリットもあるわけです。今まで皇居でなかったらおそらく企業に喰いつくされて灰色のコンクリ

ートと化したことでしょう。ムダの効用ということとは私達が考えるよりずっと大きなことではないでしようか。皇室費用と宮内庁合計六十億の年間費用は莫大といえは莫大であるけれど、自衛隊が購入する戦闘機一機の値段を考えたらそれ程ムダでもないと思うのですが……？

話が脱線しかかってごめんなさい。私が言おうと思ったのはもう少し気楽な問題から話し合おうということなのです。あのよう立派なことが書けなければ恥かしいなんて気が起りそうな感じがします。先日亀山さんに電話して「肩ひじ張らないで気楽に行こう」と言ったら「そういうことハガキでいいから書いてよ」なんていわれて、仕事途中の電車待ち待ち、シコシコと書いている訳です。仲間を作ろうと思ってもむづかしいと逃げられる、これは今まで何回か経験しています。

お手伝いもしないで勝手なことばかりいって申し訳ありません。せいぜい努力して原稿を書くのをお手伝いの第一と心得ることにいたしますが、第二として、会員の皆様にちょっと提案をしようと思います。それは「わいふ」の体裁がわかりましたから同じ字数の原稿を書こうということ。そうすれば編集はすっと楽になりますし、割り付けがしっかり出来ていれば印

刷所もずっと手間がはづけます。句読点、カッコ、行替時の一字あけなどみな一字分にかぞえてよいと思います。差出口ながら、忙しい編集の皆様のためにどうぞ御協力くださいますようお願いいたします。よろしく。

●矢内さんはこのおたよりを、タテヨコにケイを引いたりコピー用箋にきちんと割りつけて送って下さいました。心のこもったお便り、本当に有難うございました。(編集部)

鎌馬区

青木やよひ

お送り頂きました「わいふ」隔々まで、面白く読ませて頂きました。一つはいわゆるリブの雑誌に見られない、色々の立場の意見がりのままだに出ているのがよく、もう一つはマス・コミでタブーになっている天皇の問題に、主婦的感覚とでもいう、なにぐわなさでとり組んでおられるのを見事だと思いました。(後略)

●一三八号について、この他にも皆様から色々お便りを頂き心から感謝しております。紙面をかりて御礼申し上げます。(編集部)

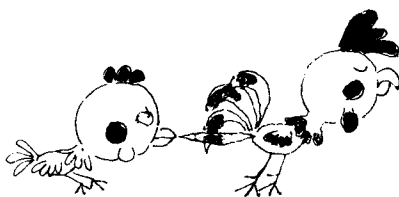


特集

日本の夫

夫必読のアンケート

怒る妻
喜ぶ妻
しらける妻
諦める妻
いや もうケツコウ
コケコッコー
とは これはまた
気のお早い
見ざる
聞かざる
云わざる族の
夫必読のページ
ここにあり！



特集の第一企画として試みたアンケートに四十一通の回答がありました。その内容は日本の夫の妻に対する生感を、驚くほどはつきりと浮きばりにしています。アンケートは次のようなものです。

- (一) 日常生活のうちで、夫のあなたに対するふるまいのうち
 - (イ) 腹の立つ点、物足りない点
 - (ロ) 嬉しく思う点、気に入っている点
 - (二) あなたは、セックス・ライフにどの程度の重要性を認めていらっしゃいますか
 - (ロ) 現在のセックス・ライフに満足していらっしゃいますか
- (三) 結婚年数
- (四) あなたの職業と年収
- (五) 夫の職業と年収
- (六) 夫の帰宅時間

アンケートその一

腹の立つ点・物足りない点

家庭の中では、何でも
したい放題の夫たち

この種類の夫は、家庭も社会の最小単位であり、目の前にいる妻もまた、他人の一人であるということを忘れてはいけません。

十八人の妻が、どんな不行儀も、自分勝手も、相手を無視したふるまいも、家庭の中では許されると思ひこんでいるらしい夫を、苦々しく批判しています。

この種のふるまいには三種類あって、それぞれニュアンスが多少違います。

・行儀がわるい夫、六人

食事をしている前で平気で痰を吐いたり、お茶で口の中をゆすぐ夫、食事中、妻の目の前で入函を外す夫（ギャッ！）汚い言葉にオナラ、ともかく、無法地帯さながらです。

・ゴイング・マイウェイの夫

いくら注意しても散らかす夫、手伝わてくれるのは有難いが、失敗だらけ、注意すると怒って放りだす夫など、さまざまですが、この種の欠点に対しては、妻

は怒るといっても寛容で、どこかに微笑を含んでいます。

・妻の気持を無視する夫、八人

まじめに話し合おうとしない、話しかけても無視する、妻の友だちが来ても自分にはカンケイないという顔つき、妻が甘えて抱きつくときと苦い顔を押しもどす（！）など、妻の気持を無視したふるまいに対する憤懣を、軽く扱う夫が多いようですが、もっとマトモに受けとめる必要があるのではないのでしょうか。

妻は家庭の従属物、独立した

個人ではないという思いこみ

数の上では十五人と第二位ですが、妻を従属物として束縛しようとする夫は、深刻な反撥を買っています。このタイプの夫には、これまた三種類あります。

・家事育児を手伝わない夫、五人

家事育児は女性の仕事と思ひこみ、あぐらをかいている夫は、やはり快く思われてはいません。

・妻を束縛する夫、五人

妻が新しいことをしようとすると難色を示す、妻の地域活動を徹底的にけなすなど、とかく妻の足をひっぱる夫が多いようです。それも趣味的なおけいこことなどは黙認するのに、社会的活動はいい

アンケート回答

結婚三年 中学教師

(一)・家事育児は女性の仕事だと思ひこみ、ほとんど協力してくれない点。・余暇時間——テレビを見てダラダラと過ごすのでなく、もっと積極的に活用してほしい。

(ロ)・もの見方が、比較的似ているので、話す話題が一致しやすく、話し相手になってくれる点。・私自身のことを、まあまあ理解してくれる点。

(二)・まだよく分りませんので、遠慮します。

結婚十六年 専業主婦

(一)・男女同権は口ばかり、父親の権利、夫のワンマンぶりは最高。「何のために飼っている」「家事万端ソツなくするのが妻の務め」が口ぐせ。・以前写し書きのアルバイトをしていた時、急いで家事をすませてアルバイトに取りかかったら、折角書き上げたものを全部引き裂かれてしまった。そそくさと扱われるのがいやらしい。

・私が地域で取りくむことに對して徹底的にけなす。

(ロ)・年に二、三度飲み連れに行ってくれる。来客の時は台所に立つ。私が病気の時は親切。（もっとも丈夫だから寝こんだことはあまりない）

結婚十年 専業主婦

(一)・自分のしたいことは思うままやる人であるのに、私が自分のしたいことを第一義に考えてしようと思う時は、どうも腹立たしいらしく協力的でない点。

(ロ)・イの裏返しでもあるのだが、私と夫の共通の趣味など

顔をしないのがふつうです。

・男尊女卑の夫、六人

前二者の夫がもう少し悪くなると、日本の男性につきもののこのタイプにころがりこみます。何につけても女はバカだ、女はくだらないと口走り、何のために飼っている、家事万端を整えるのはお前の役目、と押しつけてくる夫は、どんな両親に育てられたのでしょうか。これほど露骨な男尊女卑の横行は、日本独特のものかもしれません。

暴力をふるう夫が一人。ショックです。

はりのない平凡な

夫、これまた不人気

どういふものか、真面目すぎ、まともすぎる夫に対する不満が第三位、六人の多きにのぼっています。会話に面白さがない、夢がない、などという妻の声は、夫に対する過大すぎる要求である、と片づけてしまっただけのよいのでしょうか。

その上、テレビなどをみてほとんど読書せず、だからだと余暇を過ごしている夫を飽き足りなく思っている妻の数五人を加えると、覇気のない夫への不満はかなりの数になりました。妻の要求が高すぎるのか、夫が大人しすぎるのか、妻の「男らしさ」のイメージが固定化し

ているのか、これは、理由を解明し、分析するのにはなかなか難しい問題だと思われまます。

あわれ、エコノミックアニマル

日本の夫のエコノミック・アニマルぶりとはもはや伝説的にすらなっています。夫婦の関係も、その歪みを受けていることがはっきりしました。仕事一途でゆっくり話をすることもできない、帰宅時間が遅すぎる、などの共通の不満は、それが夫の意志からではないとわかっていてだけ深刻なものがあります。三人

母親コンプレックスも健在

母親への甘えから脱けられず、妻や娘にまでそれを要求する夫、親に対して弱い夫、計二人。伝説的なトラブルのパターンが健在であることを示しています。

* *

最後に、夫族の名譽のために。とくに不満のない妻が四人！

そのうち二人、共働き。結婚六年と十三年。他の二人、一人は専業主婦、一人は三十五万の年収のある妻、結婚四年と九年です。

には、いとも嬉しげにさそってくれたり、参加してくれる。
(一)イ・生活のパロメーターみたいなもの。
(ロ)・満足していると思う。

結婚四年 英語教室教師

(一)イ・包丁を洗わないで、包丁さしにしまうこと。サンマを切ってそのままの時など、ケーキでも切ろうとする時だとカッとする。・家事に口出し、手出しをするのは結構だが、待つのが嫌で手早くやるのが身上なため、作業が難になったりミスったりしても、あくまでゴーイングマイウェイで改める気配が薄く、少しでも口出しされると放り出す傾向がある。・世のいわゆるモーレツ社員に比べるとかなり仕事のウエイトが少ない感じ。仕事に自らを埋没させている人よりはいいと思うが、もし仕事に不満で自分を生かせないのなら気の毒に思う。エネルギーの対象は現在では植物の世話、テレビ、読書などだが、もっと思い切ったことをしてもいいと思う。

(ロ)イザという時、彼なりに精一杯責任を果そうとするので、頼れる感じ。・自己が確立しているので、まわりや世の風潮に左右されることが少ない。

(二)イ・メンタルライフと表裏一体を成すもので、メンタルライフさえうまく行っていれば、セックスライフもそのカッブルなりに上手いくものだと思う。

(ロ)・メンタルライフがうまく行っていると思っているので満足。

(一)イ・「女は馬鹿だ」の持論。

結婚十三年 主婦年収50万

気に入っている点、嬉しく思う点

自由をわれらに!!

いやがられる夫の姿を裏返せば、すなわち好かれる夫。アンケートはこの真理をそのまま反映しています。

圧倒的第一位、十三人の妻が、自分を束縛しない、ということだけで夫に感謝しています。この内容は大体二つにわかれています。

・妻の外出をいやがらない、住民運動に参加するのをみとめてくれる、行動を束縛しない、など、妻の自由を許容し、みとめているタイプ。十一人。

・食事に関して文句を云わない、日常あまり手がかからない、金銭、家事一切を任せてくれる、というネガティブな束縛のなさ。五人。

十四人の妻のうち、九人が専業主婦。その場合、妻の自由は一応みとめても、家事に支障のない範囲で、という条件が、有形、無形につきまっています。

対話と理解と やさしさ

なにやらどこかの知事のうたい文句じ

みですが、他に欠点があっても、妻の相手をおくうがらずに努める夫は、妻に大きな喜びを与えています。十人。

話し相手になってくれる、と喜んでいる妻が六人。自分を理解してくれる、というのが二人。その他が二人です。

次に九人もの妻が、嬉しく思う点として、夫の「やさしさ」をあげています。

驚くことに、皆がみな、「気が大きく、やさしい」とか「心づかいがやさしい」とか、まるで申しあわせたように「やさしい」という言葉を使っているのです。「やさしさ」とは何なのでしょう。

まず仔細にみると、「やさしい」夫には、男尊女卑の夫と、育児家事を妻に義務として押しつける夫は、一人として入っていません。ただし後出の、育児家事を積極的に分担し、協力する夫としても分類されていません。

さらによく見ると、「やさしい夫」は九人のうち四人まで、まじめすぎ、まともすぎて、物足りないと言われる夫の種類に入っていることがわかります。

どうやら「やさしい夫」は、強圧的な夫でも、官僚的な夫でもなく、さりとて積極的な妻の協力者でもなく、言葉や行為の、ちょっととしてニュアンスで、妻に「やさしい」と感じさせるひと、妻にあ

(ロ)・「女は馬鹿だ」を証明すべく男っぽく生きている点。自分の信念を誰がどう云おうと崩さず、敢然と立ちむかっていく男っぽさ。

(一)・30%ぐらい。あと精神的なもので結びついてると思う。(ロ)・まあ満足しています。(浮気もしてみたいですが、即刻離婚と云い渡されてるので駄目みたい)

結婚九年 専業主婦

(一)・いつも自分さえ我慢すればという融通のきかぬ性格は見ていて腹立たしい。そのはけ口として、弱いのに酒に飲まれることあり。

(ロ)・うだつの上からぬ人と期待もしていませんでしたが、色々な処で不特定の人に信頼されていることが徐々にわかりまた公の場でシャンとしている夫を見て、やはり男たナァーと、見なおした。人間としての優しさとか誠実とて

そういうものでしょうか。それはとても大切なものであると感じています。・自分自身にきびしい向学心のある態度。(一)・体の弱い私は夫の求めにも余り応ぜずそんな時淋しそ

うにしているのを見ると、妻として情ないと思う。肉体的結びつきも、お互いをより理解するために重要だと考えますが、年経ると、精神的要素がより強くなると考えられます。

(ロ)・イエス

結婚十八年 準地方公務員

(一)・価値観が似通っているせいか、本質的な事ではとくに思い当たることはありません。

(ロ)・共働きのため、家事が土、日に集中しますが、その土

まり要求がましくない、そのかわりいさ
さか大人しすぎて覇気のないタイプのひ
とが多い、といえそうなのです。

しかし妻たちは、夫の「やさしさ」を、
大きく評価しています。

小さな心づかい、小さな愛の表現が、
人生にどれほど大きな意味を持つものか、
あらためて考えさせられるのです。

本感到感謝されている夫も

さて、妻が全面的に評価する夫は、当
然のことながら、妻を自分と対等の人間
としてとめ、生活の中で協力してくれ
る夫です。

妻がダウンすると黙っておいしい食事
を作ってくれる夫、家事育児を平等に分
担してくれる夫、六人の少数とはいえ、
これらの夫の存在は、大げさに云えば、
日本の夫婦像の未来に、明るい光を投げ
かけています。

六人のうち五人までが共働き。うち二
人が夫婦はば同等の収入があり（二五〇
万—三〇〇万）、他の妻たちもそれぞ
れ、百万前後の収入を得ています。妻の
経済的自立は、平等な夫婦関係をつくる
ための、十分な条件ではないけれど、必
要な条件である、と云えるかも知れませ

ん。

その他・妻の身内の悪口を云わない・
子どもの前で妻の悪口を云わない・男ら
しさ（二人）・自分の信念をまげない・
誠実さ、などがあげられています。

アンケートその二

セックス・ライフの重要性和満足度

編集部がこのアンケートに踏み切った
のは、第一に、妻の、セックス・ライフ
における満足度と、夫の日常の態度とに
関連性があるかどうかを知るため、第二
に、世上に氾濫している性に関する情報
が、実は男性ジャーナリズムのどっち上
げた、まったくの虚像ではあるまいかと
いう疑いを解明するためでした。「暮し
の設計」五一年一月号にも、妻の性知識
の増大が夫を苦しめている、と村松博雄
氏が言明していますが、一般的状況とし
て、そんなことがはたして真実なのでし
ょうか。

41人の全回答者のうち、この点につい
て34人が答えて下さいました。結果は一
般化するのが難しい部分も多く、アンケ
ートその一のように割切れませんでした
が、かなりの程度まで、結婚生活におけ
る性の実体が現れていることは確かです。

日に、会合や親類の交際などが重なることがあります。そ
んな時、夜帰宅すると、あらかじめ片付けておいてくれ、私
は入浴してねるだけ。尤も必ずといってよい程、風呂を沸
かし過ぎたり、鍋がこげついたり、副食物を作りすぎ
て、二、三日同じものを食べたたり、ということになります
が……

(一) 日常生活、とくに子どもの事などで焦立っているとき、
鎮静的な役割を果たしてくれることがあります。外で発
散することなど思ってもよらぬ夫のためには、なくてはなら
ぬものだと思いますが、私は、いつも受身。

(ロ) 月に一、二回、可もなく不可もなし。

結婚十九年 専業主婦

(一) 母一人子一人のせいか姑はつよいので、夫の身内の交
際に関してはいつもツンボ状態におかれる。私はお金を出
すのと努力奉仕だけ。

(ロ) 私の外出を嫌がらない。(モニター会議・施設見学等)

結婚十六年 バイト収入50万の主婦

(一) 家事をたのむ時、ワルイケドお願いしますという型に
ならないと機嫌が斜めになる。

(ロ) 妻がペラペラ気炎を上げるのをうさがらすに聞く。

(イ) 色どりプラスアルファ。

(ロ) 満足なのか不満なのか尺度が分りかねる。

結婚四年 専業主婦

(一) 男尊女卑で振舞うからすべての点で腹が立つ。自分の
考えに従うのが当然だし、それが妻の幸福と信じて疑わぬ。

セックスに重要性を みとめない妻もいる

この種の妻、五人。その中二人はごくさばさばと、重要でないと言え、三人は、怒りをこめて、自分には関係がない、重要でないと言っています。前者は結婚二十一年と二十二年。比較的結婚歴が長い人が多いのは、意識においても、現実においても、重要でない、と言いつつことのできる客観的条件が揃ってきているためと云えるでしょう。一人だけ満足度ふつうと答えています。

後者の三人の夫は、暴力的な夫、妻を無視するタイプと男尊女卑の夫でした。満足度には、一人が煩わしい、もう一人が、土足で人の気持をふみにじる、最後の一人が、私に、夫に養われているという意識がある限り不満足、と答えています。

圧倒的に多い あいまい型

十九人が、観念と現実とのくいちがいを見せた、アイマイな答えをしています。・精神面の重要性を優先させている人、六人。メンタルな面がうまくいっているからセックスもうまくいっている、精神

的な方に重点をおいている、など、満足度はまア満足、とか、まアまア、とか、あまり迫力がありません。結婚年数四年——十三年とばらばら。

・自分にとってはさしたるものではないが、夫にとっては重要だろうと思う、が二人。満足度、いつも受身、可もなく不可もなし、一人。夫の生理的要求にあわせる程度、一人。

・性の重要度がよくわからないと答えた人二人。結婚三年と四年。うち一人が満足と答えています。

・セックス・ライフの重要性をみとめながら、現実には不満と答えた人三人。この三人は性に一定の理想を持っていて、現実がそれにマッチしていません。一人は夫に妻の日常的な愛の表現を受け入れるやさしさがなく、もう一人は男尊女卑の夫です。次の一人は、結婚生活は情熱を持続させない、情熱なしのセックスは無意味、という理由です。

その他・それだけが大変重要とは思えない・夫婦円満のすべてでもないが無視することでもないと思う・大切であるが、十年もすると新婚の時ほど重要とは思えない・お互いの信頼関係を保つ要素の一つ、などさまざまな表現がありました。満足度は、妊娠がこわくて不満が一

(二)・相互の人格を尊重する間において、自然な愛の表現はより深い絆をつくる。人格の尊重がない間柄は、なお封建的で、女性身心ともに解放されない。

結婚二十八年 孫ある専業主婦

(一)・自分の着ていたものを片づけようとしな。・人口出口、開けたら閉めることを知らない。・風邪をひいて気分が悪くても一日もフロを休まない。

(ロ)・私が主人より遅く帰宅しても不眠を何も云わない。黙って食事の準備のできるのを待っていてくれるので、これだけはすまないと思うこと度々あり。

結婚十六年 地方公務員

(一)・毎日、テレビとかマンガ誌などがレクリエーションの夫に腹が立つ。向学心が足りない点がある。・共働きに賛成で、家事の手伝いなど随分と協力してくる。やさしい点はエリート社員の夫では得られないところで、働くことの好きなど、お人好しのところなど、やはり、この人でなければと思う。

(二)・夫婦生活に占める割合はとても重要。気持と身体にゆとりがあってお互いに相手のことが考えられる時はうまく行くのでは……。

(ロ)・出産の時期を通りすぎて次第に妻の方も満足してくるのではないだろうか。しかし、女の方はすいぶん気持の上で「ムラ」があるので嫌な時も多い。嫌な時は嫌と云える、女の自主性も尊重されることが大切だし、お互いの思いやりのある、人間関係が必要。

人、満足不満足の尺度が分りかねるが一人、あとはまあ満足と答えています。

このグループの答えは、二三の例外を除いては、アイマイさがつきまといるので、明確な分析はむづかしいのですが、次のことは云えそうです。

セックスというものは、個人差が大きく、情報としても伝達不可能な部分が大きいので、誰もが、限られた自分の体験を手がかりに理解する以外になく、世間の通念や、夫の意見に従って性についての観念をつくりあげてみても、それはごくアイマイな、中途半端なものにすぎないこと。満足、といっているが、真の満足感からは性の重要性への認識が生まれるはずなのに、それが伴っていないところを見ると、「満足」の正体もいささかあやしいこと。

大部分の妻にとっては、セックスの満足度は、メンタルなもののありかたによって左右され、たとえセックスが強烈な満足感を与えなくとも、大きな不満は感じないこと。それゆえ、セックス・ライフにある程度の重要性をみとめているこのグループの妻たちのうち何人かは、年とともに第一グループの妻にころがりてむ可能性も感じられること。全体に性に

対して、受身な態度がうかがわれること、などです。

本当の満足を感じて いる妻は25%

さて、アンケートその二に対して、フルに肯定的な答えを出した妻たちが、八人ありました。回答者の約25%です。

このグループの妻は、ほとんど何の註釈も、保留もつけず、セックス・ライフの重要性を朗かに肯定しています。もちろん、観念と現実のあいだにほとんど何のズレもありません。

充実したセックスのあとは二人とも心身ともに爽快と答えた結婚六年の妻。とても重要、気持と体にゆとりがあって、お互いに相手のことを考えられるときはうまくいく、と答えた妻、結婚十六年。結婚生活はこのためにあるというぐらい重要と答えた妻、結婚十七年。少なくとも私どもにとっては、愛情の結着点なので大変重要と答えた妻、結婚十五年。

それではこう答えた妻たちは、とくにセックスの能力度の高い人はかりなのでしょううか。

結婚生活はこのためにある、と答えた一人がいることから、能力に個人差があることはたしかです。

結婚十六年 パート勤務

・日本の夫の共通点。自分の妻を一個の人格として認めないところ。外でいくら男女平等を説いている人も、思想的に新しい考えを持っている人でも、こと妻のこととなると、これは又何としたことか！我が家の夫も当然その中の一人であるわけだが……ところがところが、家庭とはそういうもの、夫とはそういうもの、とおさまり返っている妻の、これが又何と多いことか。

結婚十五年 洋裁教師

- (一) イ・まともすぎるところ。
ロ・心が広く、やさしい。
(二) イ・少なくとも私たちにとっては、愛情の結着点ですので、大変、重要。
ロ八分通りは満足している。

結婚十四年 専従者

- (一) イ・私が趣味でやっている事については、大体黙認してくれるが、奉仕活動のような事に対しては、あまりいい顔をしていない。例えば親子劇場運動の事など。
ロ・私が体が余り強くないので、ダウンすると、イヤな顔一つしないで、おいしい食事を作ってくれ、何かにつけて体のことに気をつけてくれる。私が自分の趣味としてることについて、時間的なことなど協力してくれ、経済的にも本を購入することなど許してくれている。
(二) イ・私どものように離れてくらしていると、(主人は勤務関係で年間半分は不在)精神プラス性生活が大切と思う。私は満足しているが、夫は不満もあると察しているが、夫

しかし夫はどんな人たちでしょう。
アンケートその一を参照してみると、

まず八人中六人まで、妻が「不満がない」と答えた夫、あるいは些細な欠点はあっても、「やさしい夫」として分類されている夫たちであることがわかります。六人中二人が夫婦ほとんど同収入の共働き、あとの四人のうち、三人の妻が百万以上の年収がある共働きです。うち一人は、夫の転任で別居中なので、マンネリにならないという特別な理由をあげています。残る二人のうち、一人は男尊女卑の夫。ただし同程度の収入のある共働き。他の一人は、行儀がわるく、妻とまじめに話し合いをしようとしない夫ですが、反面、家政は妻まかせの寛大さと、その気になれば理解が早いという長所を持っています。

八人という数は余りにも少なくて、結論を出すのはためらわれますが、以上を総括すると、自ら一つの傾向が浮かびあがってきます。

ほとんどの夫婦がメンタルな面でうまくいっていること。メンタルな面で条件のわるいときは、妻の収入の面でカヴァーするなど、妻が夫に劣等感を抱くことの少ない条件が揃っていること。全体に、収入のある妻が多いこと。

これらは偶然の条件であると云ってよいのでしょうか。

真の意味で健康な、充実したセックス・ライフのためには、夫婦の間のどのような人間関係が理想的なのか、より広汎な、より掘り下げた調査が、真実を明らかにしてくれることを望んでやみません。最後に、意外なことに、このアンケートでみる限り、夫の帰宅時間と夫婦のセックス・ライフのありかたには、ほとんど見るべき関係がなかったことをつけ加えておきます。

アンケートの分析を終わりたいま、浮かしてきたもの。

夫に対する妻の最大ののぞみを、一言で云い表わすならば何でしょうか。

それは対等な、一個の人間として扱ってほしい、という、ただそれだけのことには過ぎません。

当然すぎるほど当然な、この望みは、

しかし現在の日本の夫婦のあいだでは、意外に実現されていないことが分ります。

夫が、自分の活動を自由にさせてくれる、ということを感じする妻、いやがらずに話し合いの相手になってくれることを感謝する妻。対等の人間同士ならば、

自身肉体のみの結合でなく心身ともにとっているので、私は内心他の夫族もこうなのかと思っているが、マンネリにならないのは、良い事だと思っている。

結婚十三年 会社員

(一) 帰宅時間が遅いこと。遊びでないことが分るだけに、仕方がない半面、腹の立つ点でもある。

(二) (イ)・それこそ微妙なところで大事だと……しかしそれだけが大変に重要だとは思えないし、曖昧で申し訳ありませんがマイペースです。

(ロ)・まあまあのところですね、主人は不満のようすが。

結婚二十三年 専業主婦

(一) (イ)・仕事でいやなことがあった時、私に何かと当たり散らす、見るもの、聞くもの、すべてに文句をつける。

(ロ)・私の趣味に理解があり、何でもやりたいことをさせてくれる。けれども家事をおろそかにする事は許されない。

(二) (イ)・私の身内の悪口を云わない。

(ロ)・精神的な方に重点をおいている。

結婚六年 中学教員

(一) (イ)・特にない。学生恋愛結婚だったこともあって、まだ学生時代の続きのようなつき合い方をしていると思う。従って私にも独立した一個人としての思考と行動を求め、生活の中でも全く対等な立場にあると思う。家事育児の面においても、二人で協力してやっている感じが強い。

ごく当然な事柄が、これほど感謝されているということは、考えようによっては不思議なことです。

夫と対等な個人として扱われていない日本の妻の状況が、妻の「感謝」そのものからさえ、はつきり浮きあがってきてはいないでしょうか。

平等で、やさしさに溢れた夫と妻の関係をうみ出すために、現在の、性的分業をとる家庭のたちが真にふさわしいものかどうか。アンケートは、その疑問にもある程度の答えを与えてくれています。が、この問題については、これからさまざまな角度からごいっしょに考えていきたいと思えます。

このアンケートを企画したとき、編集部では正直のところ、どんな結果が得られるか、雲を掴むような気持ちでした。それがこのように充実したものとなって、紙面を飾ることができ、ただ嬉しさでいっぱいです。ひとつだけ、残念だったことは、予想を上まわるたくさんのご回答があったため、当初の予定と異なり、すべてを原文のまま掲載することができなくなりました。○×式アンケートと違い、それぞれに個性的なご回答を読んでいただけないことが残念でなりません。

それにしても、現在世上に横行するジャーナリズムは、男女の人間関係の、あるいはセックスの問題を、なぜあかも愚劣で軽薄な興味の対象としてしまうのでしょうか。ものを書き、書物を出版する人間は、一つでも多くの真実を人々に知らせる責任を負っているはずなのに、現在の婦人雑誌は、なぜ偽りの部分、どうでもよい部分ばかり扱うのでしょうか。心からの憤りをおぼえるのです。

このアンケートが、歪められ、隠されていた、現在の日本の夫婦の真の姿を、ほんの少しでも表わすことができたと思えば、それは企画に参加し、協力して下さった、会員一人々々のお力によるものです。心からの感謝をこめて、このアンケートを、皆さまにお贈りいたします。

(まとも・田中)

138号でお知らせした送料は、その後の調べで120円で送れることが分りました。年間720円になります。ご送金ずみのかたは、勝手ながら次の送金の際に清算させていただきます。と存じますのでご了承下さい。

銀行振込みご利用の方は、三菱銀行市谷支店、普通預金(〇一四・四三三八三〇五)わいふ編集部へどうぞ。

(ロ)・小さな点ではいろいろあるけれども、大ざっぱに云って、自分でも認めているほどの私の身勝手と我儘があるにも拘らず、愛して？くれることと、長期構想の上に立つ私の文学への情熱を全面的にバックアップしてくれること。

(二) (イ)・充実したセックスのあとは二人とも心身ともにそう快なので、その意味で、セックスはやはり人間の生活の中で精神的、肉体的健康の上からかなり重要な位置を占めると思う。

(ロ)・満足している。夫は研究心？に富み、奉仕的なので。

結婚二十一年 地方公務員

(一) (ロ)・そのかみ夫は公民館に場を持つ「美術研究会」のメンバー。私は「管弦楽団」のメンバー。現在二人の子どもがあるが、当年四十六才のカミさんが、バイオリンを弾いている邪魔を、絶対にしないこと。オーケストラの練習に出るのに文句を云わないこと。演奏会のポスターに協力してくれること。つまり、個に立入ってこず、協力してくれる。

(二) (イ)・悲しいかな、ほとんど重要性を認めていない。

(ロ)・満足でも、不満足でもない。

結婚十三年 専業主婦

(一) (イ)・あまりないが、後始末を余りにもしないこと。気がつかなさすぎるの二点。

(二) (イ)・やさしく、私や家族を大切に思ってくれている。

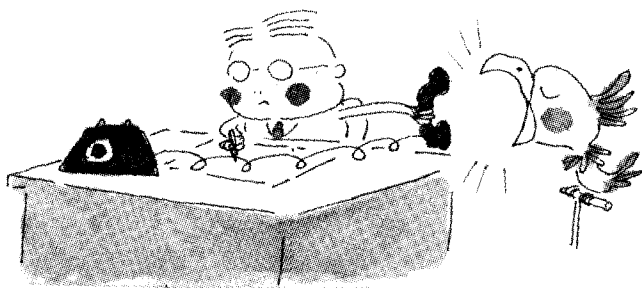
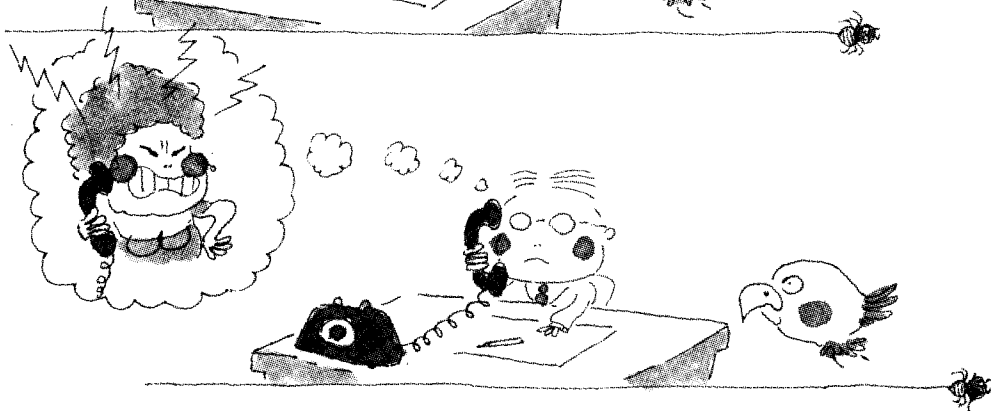
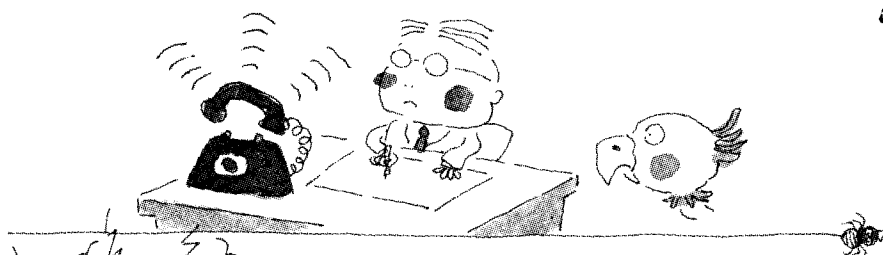
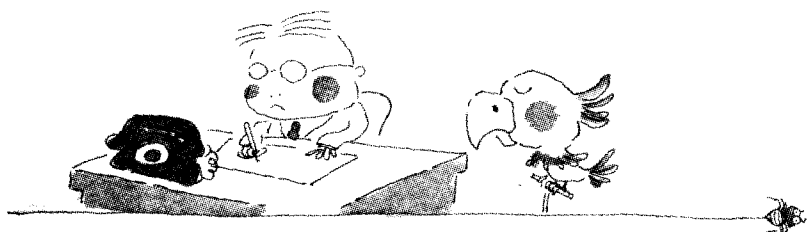
(ロ)・理想としては、セックスは夫婦間だけでされるべきであり、愛情を確めあい、慰めあえるので重要だと思う。

(ロ)・私自身はあまり快感は覚えないが、主人に抱かれた時の安らぎと安堵感、主人の喜びを思うとまあ満足している。

(完)

にほんの夫は

きく耳持たぬ



アハハ



特集投稿

四十代の夫

相模原市 菊地 一 絵



日本の夫といっても時代によって随分異なっている。戦後教育を受けた二十代の夫は女性にとって好ましく変貌しつつある。我ら四十代の夫はそうはいかず古い殻を背負った日本男児である。昔から結婚式には必ず「長き伴侶として」と言う言葉が使われている。しかし妻を助けて、とかお互いの個性を尊重して——などというのは皆無で、「妻は夫を助け一家を繁栄させるように」とだけ一方的に言われて来たのである。

家長制が厳然として存在していた時代を我々は知っている。「女、子供といった類い」の感覚が潜在意識下にあるから自分の意見に異議をはさまれた場合、殆ど無視するか或は強引に通してしまふ。その場合は命令に等しい。

今年の正月に夫の郷里へ行った。男尊女卑の風潮の尚濃く残る東北である。が四十代ともなると家の日常の実権は完全に妻が握っている。そして夫達も今更浮気するだけの体力がないのか、長年つれそって来た実績の結果、漸くわかったのか——口を揃えて「母ちゃんが一番大事だ」と言うのであった。冠婚葬祭を初めとして町会の寄り会いでも全部男衆がやらなければ体面は保てない風土を疑問にも感じず、また女を一人前として扱わない暗黙の了解を持ち合わせている連中の本音であった。

それは自分にとって必要なものとして妻を見ていることには違いない。何故に必要としているのか——飯をつくり洗濯をし、掃除し……、を始め日常のありとあらゆることに精通している妻だから——言いかえれば家政婦としての能力と自分の気持の

変化をよみとることが堪能な妻であるから——要するに便利さ、居心地のよさを提供してくれる女だからである。それ以上の事は望んでいない。

仕事のこと——商家の場合は妻が殆ど実権を握っていても代表権だけは夫が持つ。至極割のいい役である。割がいいということは、補佐役がいなければつとまらない。だから彼等は妻の外出を嫌う。自分が欲する時に傍にいてほしいのである。或る知人がいつていた。

「うちのパパなんて、何でも自然にできると思っているのよ。朝になれば自然に御飯はできるもの。お風呂は自然に沸くもの、衣服はちゃんと揃えてあるものと思ってる。御飯だってガスに火をつけなければ出来ないし、電気釜にしたってお米といで水加減してセットしておかなければできないし、お風呂だって水はって火をつけなければできないし、いくら洗濯機があるっていったって、ちゃんと操作しなければ洗えないし干してたんで、アイロンかけなければ洋服だって下着だって何にも揃わないじゃないさ——ねえ——」「プウッ——」

と吹き出して大笑いになったがその人は突然難病に冒され長いこと入院生活を送ったのでその時になってはじめて夫が妻の仕事がどんなものかわかったといった。

つい最近山口瞳がクラス会の模様を描写している文を読んだ。中年後期か初老の男たちの妻に対する思いがしみじみと描かれていたが、それによると、家の中で妻が厳然と存在していて、本心は妻の影により添うような男の姿が浮かび出ている。そして「昔はもし妻が死んだら……と空想することがあった。それは空想とはいえ、甘美な瞬間であった。それがこの年になると考えることさえ怖気をふるう。それなのに妻は平気で僕の前で子どもたちとパパが死んでも困らないようになどといって保険



金を多くするとか、どうやって食べていこうかと話しあうことがある。いてもたってもいられないような気持になるのだが、心の奥ではそれの方が気楽でよい。」というような趣旨が書いてある。社会的に昇りつめる段階が目に見えて来はじめる頃、夫の内面はかくも気弱に変化して来る。そしてこの夫たちはいう。今の若い娘を後添えにするなんて考えるだけでも恐ろしい。やっぱり我々の年令は我々の世代のものにしかわからない。もう今更若い娘にお世辞を使って神経を参らせたくない。と……これも日本の夫の一断面ではないか。

日本の夫、あれこれ

柏市 徳光 利子



戦後新憲法が出来、昔とは違って社会に家庭に男女平等が叫ばれてきた。特に昨年は国際婦人年で、ウーマンリブを掲げた運動が各地で見られた。が、しかし一般私たち身近かな人たちの生活を見聞きする時、まだまだ日本には亭主閥白(男性上位)のにおいが濃厚である。

具体例をあげると、テレビ等での亭主の発言の時「あんまり女が賢いのは困る。XX運動なんかもほどほどに……」と言ったり、「たかが女。女が社会に出て視野を広げるなんて」と、てんで相手にもしてくれぬ夫族がいるということである。もちろん、そうでない人もいる。共働きで家事なんかも先に帰った者がやり、かいたいしいエプロン姿の男性を見たこともある。年令のせいかな、最初はちょっと奇異な感もしないではなかったが、このごろでは何とも思わない。むしろ好感を持つ。

要するに現代はこの二通りの夫族の過渡期で、私たち女性の

行動いかんで家庭生活も向上し、平和でなごやかになるのだと思う。そういう意味からは夫婦は車の両輪というけれど、女性の力は偉大だと思う。

さて、わが夫にスポットを当てると、常々「出来るだけ社会に出て視野を広げよ。お金で買えない知識を蓄えよ。サラリーの半分は女房の働き」と言ってくれる。極めて話のわかる夫ではあるが、家事は一切ダメ。私がいなければ何がどこにあるか、お茶も飲めない、手も足も出ない人間になってしまうのである。最もこうなったのは、私にも半分の責任はあるのだが……。今から家事も出来る夫にするには、いささか手遅れの感があるので、せめて息子たちの代になったらと望みを托している。そこで止むなく私は家事を出来るだけ手早くやり、地域の消費者活動に首をつっこんだり、ミニ文章を綴って投稿したり、書道をやったりで、社会とのつながりを深めている次第。自分こんな状態が続くと思うけれど、そんな中からさまざまな友人が出来、思わぬ知識が得られて本当にうれしいと思う。

それというのも前述の夫の助言があったからで、家庭での対話もそんな所から生れ、先ずは平穩無事な生活だと常に感謝している。東京を離れて千葉県に移り、郵便の発着に不便を感じる場所だけれど、夫は常々嫌な顔もせず私の郵便物を、東京のポストに運んでくれる。「私設郵便屋さん」という名の由来である。「今日はあるがとう！」と疲れて帰宅する夫に心からお礼を言う私。

「女は家にいて、鍋釜をこすっていればいいんだ。生意気を言うな」なんて、封建的な夫でなくてよかったとしみじみ思う。日本の夫の庶民的一断面である。

(主婦・五十七歳)

東の夫

— 東西夫くらべ —



— 日本の夫が妻にのぞむこと —

- 味オンチがひどすぎる。もう少しましなものが食べたい。
- 遅い帰宅をいやがらないこと。
- あんまりキャンキャン云わないでほしい。
- 何でも捨ててしまわないこと。
- 遅く帰ると千円罰金をとる。やめてもらいたい。
- 朝っぱらから子どもを叱りつけないこと。
- 家の中が散らかっていても平気。もっときれいに片づけてほしい。
- 若い頃のようにピチピチしていてくれたら。
- 朝、ワイシャツの釦が絶対に取れていないこと。
- 朝おきたらすぐ窓を開けて空気を入れかえること。
- 朝食にたべる玉子が不足しないよう、必ず数を揃えておくこと。
- もうちょっとお洒落をしてきれいにしてくれたら。と云っても無理だろうなア。
- しっかり社会勉強をしてほしい。

- 朝出がけに靴を磨かないこと。
- 帰ってきた時玄関に出迎えてほしい。
- 夜遅く帰っても文句を云わないこと。
- 亭主が何を考えているか、いち早く察して、要求をみたすようにしてもらいたい。
- 休みの日だけ女房は寝坊をするが、ぼくの方が目がさめるのが早いので、一人で起きてポツンと起きているのが情ない。休みの日にも女房は早おきしてもらいたい。
- 自分が何時に帰ってきてても、いつも身綺麗にしておいて出迎えてほしい。
- 上の空で亭主の話を聞かぬこと。
- 一人立ちして生きるようになってくれ。
- 亭主の都合にあわせて、すべてをやって欲しい。
- 朝、金の話をするな。夜も金の話をするな。
- 自分で楽しめるもの一つだけでも持ってほしい。また社会的なものとにもっと関心を抱いて勉強してほしいと思う。

いま、この瞬間に、夫であるあなたが、あなたの妻にもっとも望んでいることは？

この質問に、とっさに答える場合、日本の夫と欧米の夫の答えは、どこがどう、違ってくるのだろうか。

その違いを通じて、日本の夫たちの特徴を見すべく、日本人、アメリカ人、フランス人の夫婦五十人に問いかけて得たのが上の答である。

わずか五十人前後の夫たちの答えからも、彼我の差は自ら浮きぼりにされている。

悲しいかな、日本の夫の念頭には、妻に求めるものとして「愛」という言葉はチラともうかんでこないらしい。

もっともこれは無理もない。ほんとのところ、日本に「愛」という言葉はないのだ。これは日本の土壌に根づかなかった。作りものの翻訳言葉なのだから。

ただし表現がないということとは、実体もない、と考えてもそれほど間違っていない。日本の夫は、妻のことを念頭に浮べるとき、愛の対象としてではなく、まずは家政婦的人物としてとらえている、と判断してもよさそうである。

例外的に、二人の夫が、妻に社会性を身につけてほしい、と願っている。妻の一人立ちを願うもう一人とともに新しいタイプの夫への動きとして、希望をかけたくなるけれども、妻の「社会性」が、現実には夫の家庭生活の快適さを

— 欧米の夫が妻にのぞむこと —

- 自分の転勤先にはどんな国へでもついてきてくれること。
- 家の中を整理し、食事を作ってほしい。
- ミシンを買いこんで、子どもの洋服を縫ってくれるのはよいが、新しいものを作るばかり少しは古いものの修繕も。
- 家の中をもっと片づけてほしい。
- 自分が最も能率よく働けるように、家庭環境を整えてほしい。
- 快い伴侶としての妻
- 日々をともにエンジョイする伴侶。
- ぼくを愛してくれること。
- 妻と対等な一個人としての僕に対する愛情。
- 自分とはどちらかといえば夢想家。晩は夜ふかしして、夢想にふけてすごしたい。ところが妻がさっさと寝てしまうので、味気ない。
- 家の片づけ。
- 何ひとつない！（シニカルに）
- 完全な自由。そのかわり妻にも完全な自由を認めているのだから。

西の夫

— 東西夫くらべ —



- 人の前で夫を批判しないこと。
- 食事のあと、汚れた皿をそのままにしておかず、すぐに片づけること。洗濯ものを二、三週間もためないこと。庭や家の外まわりをきれいにすること。
- ホステスとして、夫の社会的立場がよくなるように、客をもてなしてほしい。
- 男が家長であることを忘れるな！ なせアメリカ男が東洋女と結婚したがるか、アメリカの女は知っているのか。（日本人妻を持つ二世）
- うるさくガミガミ云わないでもらいたい。
- 自分のほうに少し家事の負担がかかりすぎているように思う。もう少し平等に分担してもらいたい。
- 何もない、満足している。
- 一、愛。二、やさしさ。三、家庭的、社会的な力ぞえ。
- 完全な自由を要求する。
- 自分の感情をかくさず、ありのままに表現すること。

減することになったらどうだろう。この二人の夫が「亭主の都合にあわせてすべてをやっている」一族に变身しないことを、祈りたい。

ところで、出るわ、出るわ。日本の夫の注文の、細かいこと、具体的なこと。ワイシャツの釦から始まって、遅い帰宅をいやがるな、朝、金の話をするな、靴を磨くな……

もっとも欧米人だと、妻に家政婦の役割は期待している。内外の一大共通点は、家庭の整頓である。婦の字が示すがごとく、洋の東西を問わず妻の役目はここにあるらしい。

しかし一体に、欧米人の注文は、日本人ほど細部にこだわらないふしが見える。反面、それだけ要求の度も高い。妻の社会的役割が重いか、ホステスとしての能力も要求されている。万年家政婦の日本の妻は、楽といえばこれほど楽な商売はない。

もうひとつ、日本の夫が絶対に口にしない言葉がある。

相互の、完全な自由。

これは、おそろしい言葉だ。

強烈な個の自覚の上に成立っている、西欧社会のはけしさ、きびしさの一端がここにのぞいている。どれだけの日本の夫が、妻が、このきびしさに耐えられるだろうか。

日本は、まだまだ平和な島国である。（T）

性の終身雇用

大庭みな子



(一)

アメリカの男は、女を大切にするように思われているけれど、あれは別に女を尊敬しているわけではなくて、弱いものを保護する、という考えなんです。ドアは開ける、重いものは持つ、それに家では日本の男より働きますけれど、アメリカの男は家庭の中では強いですよ。

何といっても経済を握っていますから。日本では女房が大抵月給袋を握っていますでしょう。もちろんこれは、日本が貧しかったからだと思います。収入が絶対的に不足で、暮らしていけないほどの額なら、女房に全部任せてやりくりしてもらほうが楽ですから。ところが収入がふえてきても、それまでの習慣で、女房が月給袋を握っている。これはやはり、力になっていますね。

一般に、アメリカの奥さんの方がよくつとめますね。結婚後十年、二十年しても、ご主人の帰る時間にはせつせとお化粧なんかして。すいぶん気を使っている。もっとも男のほうも同じで妻に気を使うし、つとめますけれど。

夫の勤務地を決める場合なんかでも、ワイフがどういうか、聞いてみるというのは、これはもう当り前の返事なんです。配偶者の意志をつねに気にするということは、男だろうが女だろうが当然のことなんです。

日本の男たちも実際には女房のことをかなり

気にしていると思うんですけどね、私も仕事の関係で男の人と接触する機会はすいぶんあるんですけども、日本の男の人は公的な場では奥さんのことおよそ持ち出しませんでしょう。

でもそういうことはむしろ不自然なことですね。ことさらにそういう話題を避けているとしたか思えない。女房のことを話したりすると自分が損をするのではないかと思っているんじゃないですか。よく注意してみると、社会的に力量のある人のほうが平気で女房のことを話題にしますね、日本でも。

でもアメリカでは勤務地を含めて職を選ぶとき、女房がいやだ、といえそれが理由としてみとめられる。それが通る社会、誰も不思議に思わない社会なんです。

(二)

大体あの国でパーティで夫婦をカップルでなく片方招かなくては思いも寄らない。スタックパーティなんて特殊なものでなければ。そして奥さんは誰でも自分のうちでホステスとしてふるまわなければならない。そういう時対等に同席する人たちと会話ができるかどうか、女房の資格として重要視される。日本ではすぐ男は男、女は女とかがたまってしましますけれどね。社交の上で男と女はお互いに混り合ってやっとなければという考えがあるから、夫の方も自分のキャリアにふさわしい実力を妻に持



たせようとする。

大学で自分がドクターの資格をとったら、今度は妻にマスターを取らせようとしたりしますね。

女房をえらぶ時からすでにそう。大体大学の四年までに七・八割が結婚しちゃうけど、日本と違って、女の眼からみても、あのひとなかにかいいなと思う女性から売れていく。学者なら学者、ビジネスマンならビジネスマンと、自分の将来にふさわしい能力を備えた女を選びますね。本当のいみで片腕となる人をえらぶんです。

だから能力が大体同じような人間がカップルとして成立する。たまには釣合わない夫婦もありますけれど、どうもあれはつりあわないなと思っただけで、その内別れてしまう。必ずといっていいほど別れてしまします。

そうやって最終的には比較的つりあった同士のカップルができる。

そういう考えたから奥さんはご主人の機嫌をとりますね、自分にふさわしい旦那さまだと思っていれば。安心しきっていらいたいなんどきどうなるかわからないという考えがあるから。

日本では反対に、お互いに結婚してしまえば、もうまるっきり、生涯の指定席を買ったような感じですよ。お互いが配偶者に対して権利があると思ひこんでいますでしょう。そうなるのだんだん性的魅力にも乏しくなるし、色気もなくなるし……そのへんがアメリカとは全然ちがいますね。

(三)

まあ、考えてみれば能力のある人間にとって能力を生かせる社会だけれど、あまり力のない人、怠けたい人にとってアメリカは住みにくい社会でしょうね。反対に日本の社会は能力のある人にとっては大変につまらないのではないかしら。

アメリカでは大体奥さま業をしていてもあまり退屈ではありませんね。銀行家の奥さんになんかなったならその忙しさは大変なものです。

何しろ大企業の入社試験では面接のとき奥さん同伴のところが多い。ちゃんとしたポジションの試験ほど女房同伴のイ

ンタヴェーが多いんです。本人はよいが女房がダメだということもあるんです。

ともかく終身雇用制でないから、企業でもベイのいい方、条件のいい方へどんどん移る。スカウトされる状況がいつもあって、一生どこからも口がかららないで一ヶ所にいるなんていうのは無能力の証拠みたいなもの。そんなふうには、社会全体が能力主義だから、男と女の仲も、そうなんじゃないかしら。いやなら、やめますというのが根本にある。ともかく「あなた離婚したことおありになる？」なんていう質問がいまでは日常会話の一部ですから。

もっとも福祉という面から見れば、日本の年功序列制、終身雇用制にもむしろ新しい面もあると思うんです。社会的無能力者の扱い、老人の扱いなど、今では彼らが日本に学ぶべき点もあると思うんですけれども、しかし日本人は、あまり人に頼ることを考えないほうがいいんじゃないかしら。

アメリカの女が、結婚相手の男の最大の欠点としてあげるのは、母親っ子ということですね。日本でも母親べったりの男は問題だけれど、そのことが、それほど恥ずべきこととはされていませんでしょう？ アメリカでは、母親っ子であることは、女にも、他人にも、軽蔑されることなんです。だから女に好かれようと思えば、事実上、母親っ子であっても、そうでないふりをしなければならない。一人前の人間は、甘え

があつてはいけないんです。

外国の老人は、一人になつても人の力を借りずにやっていきますね。日本人は、そういう姿を肯定的に見るよりも、むしろ哀れだという見方をする人が多いけれど、私はそういうのは甘いんじゃないかと思うんです。あれぐらい雄々しくなくてははいけないんじゃないかしら。日本人はつねに甘えが、依頼心があるんですね。会社に対しても、親に対しても、配偶者に対して

も。もう少し雄々しくならなければ、かえつてもっとみじめになるんじゃないかと思うんですけども。

(四)

日本の男の人は、妻に能力があるといやがる傾向がありますね。しかしこれは夫として自分で自分の首を締めている状態だと思います。ほんの目先だけ男のメンツを保てるかもしれないけれど、本当はもっと女に働く能力、自立する能力があれば、自分ももっと解放されるんじゃないかしら。気に入らない女房はお払い箱にすることもできるし、自分一人で一家を養わなくなったっていいんだし、仕事だってやめることもできますでしょう。

私は日本の男は外国の男に比べると本当に甘いと思うのね。例えば日本の男っていうのは、つねに自由があつていろんな女と性的関係を持

っている、あるいは持ち得た、ということを誇らしげに話すわけでしょ、そのくせ女のほうは生涯に一人の男を守っていくべきだみたいなことを云う。大体そんなこと論理的にも成立たないわけですよ。そんな矛盾することを平氣の平左で云つてる。氣がいつていうのか……

まあ彼らの相手は特定の商売女なのかもしれない。そういう男に限って他人の女房と話をしたつてつまらない、なんていう。だけど特定の商売女だって、ちゃんと夫、ないしはそれに代わる人がいると思うの。だから彼らにとつて実質なんかどうかでもないんで、みかけだけが問題なんです。本当に甘いというのか寛容というのか、外国の男のほうがずっときびしいですよ、女にかけては。日本の男はいばっているみたいで、自分でも権力持っているみたいに思っていますけれどね。やはりそういうやりかたで自分をめくらにしちゃったんだと思いますね。

外国にはプロステティュートはいるけれども、日本のようにあいまいな形で男をエンターテインする女のいる社交の場は一般的ではありません。ああいう女のひとたち相手にしたってどっちみち対等な関係は成立しにくいから、大して面白くないんじゃないかと思うけど。

欧米の男の方がよっぽど女を楽しんでいると思う。ですからね男の人たちやはり女を解放することが自分の解放につながるんですよ。そうすれば人生もっともっと楽しくなるし。

ともかく日本人は表現が美徳じゃないから、みんな、自分の思っていることをはっきり言わないので、話が面白くない。男と女はお互いに相手の性を意識することはよくないことだと思つているけれど、そんなことはごく自然な、人間らしいことじゃないでしょうか。

女を知ることによって、男の人たちももっと世界が広くなるでしょうにね。

大体女を好きだと思うことは少しも悪いことじゃないし、異性として相手の性をみとめるということが、相手を人間として尊敬するということにもつながりますでしょう。それは女の方も悪いんですよ。女としての魅力をあまり振りまきませんし、相手を異性としてよい気分にする努力もしないしね。

そういうのをもう少し自然な形で出すようにしないと、いつまで経つても男は女を好きにならないし、女は男を好きにならないかもしれない。

そうして結局つまらない一生を送ってしまうんですよ。人生は楽しいほうがいいんだから、お互い認めあつて楽しく暮らすほうがいいんじゃないですか。

(作家・滯米十二年・まとめ・田中)

138号「子ばなれの先をいかに生きるか」
高山みかば高宮みかの誤りでした。謹んで訂正しお詫び申し上げます。

サムライ・日本の夫

——かくなせばかくなるものと知りながら

やむにやまれぬ大和魂——

和田好子

(一)

日本の夫が、どうしてこのようなシロモノになったかということについて、考察した人があるのか、どうか、私は知りません。

私としては近ごろ、この問題に大きな興味を感じ、乏しい知識をやりくりして、推論を試みていましたが、それをこの機会にまとめてみようと思います。ものにはなんでも原因があるはずですし、原因を知ることによって、未来を築くことができる。そう信じているからです。

日本の夫のいちじるしい特徴としてあげられるのは、妻に対する恋愛能力の欠除ということです。

ここに、ある衣服メーカーが行なった、二十代から五十代までの、日本男性の意識調査がありますが、“あなたは色好みか”という設問に対し、イエスと答えているものはいくつ少ない。二十四・五才から三十才ぐらいのグループが、半数ほどイエスと答えています、全体の十パ

ーセントくらいしかいません。三十五才から五十才までのグループの、六八パーセントがノーと答えており、他はノー・コメントなのです。

では、イエスとっている連中が、色好みの内容をどう考えているかといえますと、“これからの生活の中で、充実させたいことはなにか”という設問のうち、“恋人”のところに○をつけたものはまったくいないのです。○をつけているのは未婚と思われる二十才から二十三才までのグループばかりで、前記の“色好み”グループは、“やりがいのある仕事”ついで“家庭”にもっとも多く○をつけている。それでは“色”とは“妻”のことだろうか？

ではなさそうだというのは、三十五才から五十才までのグループが、“やりがいのある仕事”“家庭”に高率に○をつけており、その他でも“色好み”グループとあまり意識の差がないにもかかわらず、色は好まないと明答しているの、家庭と色とはどうも結びついていないらしいからです。

両者の間に大きな差があるのは、“遊び” “おしゃれ” についての考え方で、色好みグループは両方好き、中年グループは両方好みません。推論するに、“色” は“遊び” と結び付いており、遊びの内容としては“賭け事” “飲酒” “浪費” “外食” などを好むということがこのグループには表われてきますので、酒席にはべる女性、お金で色を売ってくれる女性が好き、それが“色好み” の内容なのだと思います。若い未婚グループは、恋人ができて欲しいと望んでいますが、色好みではないと答えている。つまり“色” は、“妻” と“恋人” と結びつかないので、彼らももっとも関係の深い女性に期待するものは、“色” ではないようです。

色という言葉に、なにかまっとうでない男女関係を感じるのだと思いますが、色のない恋愛、色のない夫婦関係というものを、疑問なく思い描いているところに、日本的特質があるのではないのでしょうか。

日本経済新聞では、昨年、国際婦人年だったからでしょうが、“わが家の男女同権” というのを連載しました。社会の第一線で活躍する著名人に、わが家の夫婦のあり方を語らせているのですが、年令が高いせいもありましょうが、“色ぬき” であることは歴然としていて、奥さんのほうもそれで納得しているようです。

典型的なのを一つあげると、住友信託銀行会長山本弘氏の話です。

「わが家のどこに何があるのか、今もって全くわからない。衣服は家内がそろえてくるものをそのまんま着るだけ。食事も出されたものを黙って食べている。特に文句は言わない。身の回り、家のことはすべて家内に任せっきりののである……私は仕事一筋の道を全力投球してきたと思う。それが私の生きがいで、家事や身の回りのことはすべて家内の領域と心得、すべて一任の方針をとった。そのかわり、家内の家事に関する意見や方針はいっさい文句をつけず、彼女の“權威” を尊重してきた……新婚旅行のかわりに、外国に一緒に出かける約束をしていたのだが、家内の入院（目を悪くしたため）でそれもできなくなった。す

っかりあきらめていたのだが、中国から、奥さんともどもおいで下さいとの思わぬ招待を受け……一緒に出かけることになった。家内も非常に喜んでくれたので長い間一人で家庭を守ってきた家内に、せめてもの償いができたと思っている。

この夫婦は趣味も同じではないので、夫は「スポーツのため、休日に家をあけることが多い」、妻は陶磁器や古寺の歴史に興味を持ち、同好の人たちと各地に出かけていたようだ。「全くべつべつの行動をとっていたわけですが、それについて山本氏は、「男女それぞれ好みも違うのだから、互いに相手の自主性を尊重し、理解することが大事」だといっています。最後に、奥さんの言い分が少々ついていますが、それによると、「いろいろな文句をいわれたこともありましたが、それでも四十二年間、まあまあ一緒に過ごしてきました。最近では、おれより先に死んだのはだめだよ、などと軽口をたたいています。若い時は“付き人” で、今は“母親” というのが私の立場のよう。この次は“お友達” になっていくのだと思います。」

他の人の話でも、このようなパターンがたいへん多いのです。夫は家庭を妻まかせにして、お互いの領域をはっきり分けてしまい、それぞれ口出ししない。趣味もべつべつ、相手を尊重したいようにさせる。「長い間一人で家庭を守ってきた家内」という夫の言葉。そして妻の、「若い時は付き人、今は母親、この次はお友達」という言葉。

どこに愛し合う男女の、互いの魅力にひかれ合う姿が感じられまじうか。

これが“色ぬき” 結婚の実態で、前記の調査結果を見れば、日本の男は老いても若きも、こういうことをべつにふしぎと思っていないのではなからうか。

“色好み” が、恋人とも妻とも結び付かないのは、まじめな結婚、まじめな恋愛は、色ではなく、もっと社会的、実用的なものだ、という認識の結果であり、当然、その恋人なり妻なりは、“女” ではないのです。

その上、多数の男が「色好み」でない、と答えているのは、遊び相手になり得る女をも、求めないということだから、日本の男は全般的に恋愛能力に欠けているというか、異性と接触することを好まないのでしょう。

ポルノ雑誌などがたくさん売れているところを見れば、まんざらの女がいなくてもなさそうですが、身辺の女性には、そういうものを求めないのです。ということは現実には女ぬきでも平気であり、妻とは家事をきちんとやって、時おり性欲のはけ口になってくれればよい、そして寛容で、自由にさせてくれればありがたい。

色ぬき恋愛のほうも、日本では恋愛結婚は長続きしない、恋愛の情熱なんて、やがては覚めてしまうんだから、好きだというだけで相手を選ぶのは危険だ、という考え方があり、当然の帰結としてまじめな恋愛は色っぽくなくなってくるわけです。相手の女性がなにごとにもきちんとしているとか、料理が上手だとか、性格が明るいとかやさしいとか、かわいけれどイザというとき頼りになるひと……などと、実用的なことを考える。

それはたしかに堅実な考えではありましょう。結婚は現実の日常生活の中にあるもので、けっして夢や幻の世界ではないから、はじめから覚めているのは賢明なことであるかもしれない。しかしこの賢明な現実主義が、なにか非常に大切な、自然なものをとり落しているように、私には思われます。

日本の男の多くが、色ということをも、酒席に待る女性と、家庭を破壊せず社会的体面を損じない範囲において、遊ぶことだと思っているけれど、私が定義すれば色とは恋愛能力のことです。異性をその心と体の両面において、いかに強く深く、感じ得るか、そしてそれを持続し得るかという能力だと思えます。

日本の男はそもそもそんな能力を問題にしていない。それにつれて女もそういうものかと思ひ込み、結婚は色ぬき、「一人で家庭を守る」妻

ができあがるのです。

(二)

日本の夫がこんなふうであるのには、もちろん原因があるはずですが。伝統とは、意識的に伝承、保持されているものだけではありません。私たちの意識の底に、ちょうど地下を流れる川のように、流れている遠い世からの心があります。私たちは生きている時代の、さまざまな社会の影響から、自分の精神を形づくりますが、すでに過ぎ去った昔の社会からも、じつは大きな影響を受けているものです。

私が目を付けたのは、現代の色ぬき結婚が、武士階級の結婚と、たいへんよく似ている点でした。

武士といっても階級として形成された時期から、封建制度が完成した崩壊する時期まで、長い間にはその意識もずいぶん変わっているわけですが、私がここで取り上げてみたいのは、近い江戸時代の結婚です。



武士は見合いということをしませんが、お互いに顔を知らずに一しよになります。江戸も末期になれば、中以下の武士は芝居や花見にことよせて、見合いらしきことをそれとなくやったそうですが、これは町人の風が移ったので、おおっぴらにできることもなく、上流の人はもちろんしませんでした。なぜかという、武士は「君父の命にあらざれば」結婚しなかったからで、武士の結婚は主君から「仰せ出され」の場合と、父の命によって「願出」て主君が許可する、という二つの手続によらなければなりません。これでは相手の顔がどうこう、ということとは問題にもならない、君命があるか、許可が下りるかで決まってしまうのです。町人のほうでは見合いもすれば、恋愛もあるので、武士のしきたりを笑い、「そうして惚れた女房を持つのは神代からのならわしだ。それを何ごとぞ、顔も見ず心も知らず、めちゃくちゃに女房と定めるから、三下り半（離縁状）のタネになるのだ。」などと言ったそうです。

しかし武士のほうでは、顔も心も問題にせずに結婚するのが高尚だと思っていました。これは初まりを尋ねればべつに高尚でもなんでもなく、幕府の政策でした。政略結婚をして勢力を拡張されるのをきらい、諸大名からはじまって、下級の陪臣に至るまで、結婚を許可制にしてしまったのです。

結婚すると、夫と妻は、ことごとくに別々の生活をしました。三田村鳶魚氏著の「武家事典」によると、

「武家では奥と表を厳重に分けて、表は男の支配により、奥は女性の管掌にゆだねてあった。低い身分の武家でも下女小間使に至るまで、奉公人の進退はことごとく主婦のからいであって、けっして主人が口出しをしない例であった。もちろん中間小者（男の召使）のほうは、主婦が口を出すことは絶対になかった。」

「上級武士になると、奥方、側女（そばめ、妾のこと）は殿様の居間へさえも来ない。奥かきりで表へはけっして出ないものである。」主人が

帰宅するときも、玄関へ出迎えるのは男の召使で、女中が迎えることはなかったそうです。いわんや奥さまは出て来ない。

「奥様が取次に出る御不勝手」。この川柳は、下級の貧乏武士が召使というものを男も女も置けないため、奥さまが客の取次に出てくるという話で、たいへん恰好のわるいことだったのです。武士の貧乏は、貨幣経済の発達につれて、次第に止むを得ず陥った状態で、タチマエ上は、武士が妻君を取次に出すなど、あるべからざることでした。

また、妻と同行して外出することもなかった。止むを得ぬ事情で同行するときは、引き離れて歩き、各々一人で行くように見せました。夫と妻は家の内外を守ってそれぞれ同等だから、同行して妻がお供のように見えては困る。妻の体面を重んじて、離れて歩くのだそうですが、日経の「わが家の男女同権」でも、夫妻が家の内外に権限を分けて、お互いに干渉しないのを同権だ、とする意識がたいへん強い。江戸時代の武士の意識とぴたりと合います。

君命により、「顔も見ず心も知らず」結婚し、妻は内、夫は外と持場を分け、互いに干渉せず、べつべつの世界に住み、一しよに歩くこともない……このような結婚生活に、色……つまり異性としての愛を育てることの困難は、およそ想像がつくことです。

そもそも、夫妻双方、お互いに好きかきらいか、などということは、結婚の条件ではないし、結婚生活の内容でもないのです。妻は内、夫は外での仕事をきちんと果すという、社会的要求に応じた外面が、そのまま同床異夢の夫婦関係となっていました。

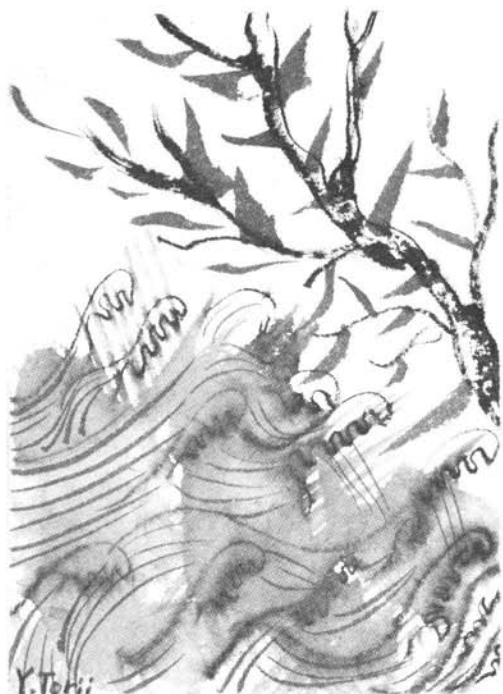
現代の日本の夫婦と封建時代の武士の夫婦とが、こんなにも似通っているのはなぜでしょうか。そもそも日本には、武士という階級ばかりでなく、すべての人の間で、このような結婚しか存在しなかったのでしょうか。

そうでないのだからふしぎな話です。

武士階級は全人口の七、八パーセント程度で、八十パーセントは農民でした。残りが町人職人その他となるわけで、つまり農民は圧倒的多数であり、大部分の人間は農民だったといつてよい。この農民がどういう結婚をしていたかです。それこそ日本の結婚であり、武士の結婚など少数の例外といえましょう。

民俗学者瀬川清子氏は、日本の農村を踏査して、明治以前の旧時代の婚姻形態を、「婚姻覚書」その他の著作にまとめられました。それによると、旧時代の農村の結婚は、今から見れば奇想天外というほど、武家の結婚とは異なったものであった。

今でもよく「若者宿」というものが、悪い意味で話題になることがあります。それは昔のみだらな風習で、「宿」に若者どもが集ってよからぬ相談をし、集団で女をおそって暴行したなどという事件が、時折新聞



紙上に現われる。これは若者宿が本来の目的を失い、旧時代に果した機能が忘れ去られ、おちふれ果てた結果の一面であって、旧時代における若者宿を、みだらというのは当たっていないと思います。

昔、若者宿は男のための、娘宿は女のための、一種の集団教育の場であって、彼らがそこで学んだものは、村のしきたりであり労働の技術であり、そして性知識であり、婚姻の道徳でした。

娘たちは糸を紡いだり機を織ったりしながら、若者たちは俵を編んだりわらじをつくったりしながら、先輩後輩の自由な話し合いの中で、時折は宿主であるおとなの話をきくことによって、必要な知識を身につけていきました。そして男女双方の宿は集団的に交際をします。ひなまつりなどには男側が娘宿に招かれたり何かの機会には女が招ばれる。つきあううちに好ましい相手をみつけ、周囲の友だちに打ち明けると、彼らは興奮して間に立って周旋してくれる。そしてカップルができ、婚前交際に入る。宿へ入る年令になると、男女ともに親と離れて寝るし、小屋を建てて別居する習慣のところもあって、男が女に通ったり女が男のもとへ忍んだり、性関係をともなった交際に入ります。互いに最初の相手で結婚に至ることはまれで、二、三人から、四、五人も取り換えた上、気の合ったもの同士結婚する。女が妊娠してしまうと、結婚を迫られやすいのは今と同様ですが、当時は「おもどし申す」などといって、生れたての赤ん坊を間引く習慣があり、現在の妊娠中絶と大差のない感覚で受取られていたのです。

子どもは七才までは神の内、といって、ことに生れたてはまた霊界の存在と考え、殺すのではない、もどすのだと思っていた。そこで子どもを始末して相手を取り替えることもありました。

地方によって細かい差はありますが、大筋は選択期間のかなり長い恋愛結婚で、結婚しても女はすぐ婚家に入らない。(武家では現在と同じ嫁入り婚。舅姑と同居した。)これは招婿婚の名残りであり、さらに古くは家の神を娘が祭っていて、他家の人にはなれなかった(他家へ行け

は神さまも移ってしまうので、習俗に基くそうです。

女が嫁入るときは、姑が主婦権をわたすときで、つまり嫁入りは姑が死ぬか、隠居するかが条件であるところが多く、おそらく古くは姑と嫁は、同居しなかったのでしょうか。いずれにしても一家に主婦は一人ときまっていたから、現今のように、両者が主婦権をもちたがって争うことはありません。嫁にやった娘に、実家がいろいろな援助（ことに経済的援助）をしてやる、またはやらねばならぬという考え方は、現在でも多くの地方に残っているようですが、これは婿側のエゴイズムのように受取られているけれど、もともと嫁は主婦権を渡されて嫁入りするまでは、実家に留まり、実家の人間であったので、それが時代が移り社会が變るとともに歪み、變形し、そして現今の社会は弱肉強食のエゴイズム社会だから、それが反映したわけです。

さて、現在の結婚は、この農村の結婚より、武家の結婚に近く、そのため私たちは、前時代にこのような方法、制度があったということすら分らなくなっています。

なぜ国民の大部分が経験したはずのことが忘れ去られ、ほんの一割にも満たぬ人たちの結婚生活が広く普及したのでしょうか？

その理由の一つとしては、明治維新によって、農村の自給自足体制が破壊され、それとともに村の組織も破壊されてしまったことがあげられるでしょう。ハタ織り、糸つむぎ、酒つくり、その他の自給的な仕事がなくなり、多くの農民が離村して、出稼きしなければ暮せなくなったので、若者宿、娘宿は廃絶し、知り合い同士の恋愛結婚もむずかしくなってしまったのでしょう。江戸時代、全人口の八十パーセントもあつた農民は、一九七〇年の統計によればたったの十七パーセントに減っています。

農村を捨てた、というか追い出された人たちは、次第に賃金生活者になっていったので、これらのいわゆる「月給取り」の生活は、はなはだ武士に似ていましたし、政府は政府で、組織的な教育を普及させ、武士

的な道徳……男女七才にして席を同じうせず、女は家を治め、男は世につくせ、といった教え込み方をしたのだから、国民総武士化という現象が起つたのだらうと思われまふ。国民の道徳と生活を指導した知識人たちは、そのほとんどが武士階級の出身ですから、農村の恋愛結婚を、「旧来の陋（ろう）習」と考え、野卑でみだらなものと断じて、その廃絶を「文明開化」だとしたのでした。

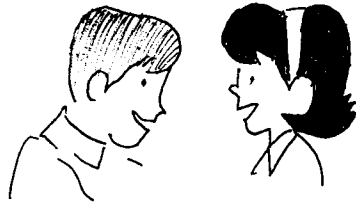
結果として、日本の男は恋愛能力を失い、ことに妻に対しては異性を期待しなくなりました。妻に「一人で」家を治めさせ、自らは仕事……武士でいえば主君に仕えること……のみに専心し、色だの恋だのはどうでもよくなつてしまつた。（ちよつと説明しておく、武士が妾を持つ習慣があつたのは、色恋ではありません、子孫をふやすためです。）いったいこれは「文明開化」であらうか？　むしろ自然な人情を失つたのではないのでしょうか？

「そうして惚れた女房を持つは神代よりのならわし」、結婚と恋愛を異質のものと思うようになったこと、恋愛を継続しがたい一場の夢と観すること……どれも神代よりのならわしではありません。古代から、日本人は健康な愛を、心と肉体とは分ちがたく、恋愛と結婚とは分ちがたいものとして、生活してきたのです。その伝統はけつして古い昔に絶えたものではなかつたのに、今さらながら、明治以来の人心の變化に驚かすにはいられません。

（完）

わいふの旧会員のうち、半分以上のかたが継続を申し出て下さいました。厚く御礼申し上げます。おかげさまで138号は全部売切れ、一息ついておりますが、赤字解消にはまだほど遠い現実です。わいふを続けるためには、一人でも多く購読者をふやす以外に道はありません。みなさまどうか、購読者増加のために、お力ぞえをおねがい致します。

高校生 座談会



出席者（匿名）

A（男） 千歳高校一年

B（女） 都立大附属高校一年

C（女） 桐朋学園高校二年

D（女） 同

（司会 編集部）

E（男） 戸山高校二年

F（男） 同

G（女） 同

H（女） 同

どうも結婚というものは

司会 ご両親の結婚のいきさつを知っているかしら。

A 何となく、あちこち断片的に聞くけど、照れてるのか余り話したがないな。なれそめなんて知らない。

ただ、東京で結婚して、北海道で僕たち兄弟が生まれて、直ぐこっちへ戻って……僕が聞いても混乱するぐらい、いろんな地名が出てくるんですよ。

とっても貧乏で、汚れた下着だけ持ってきたとか、なんとか……（笑）
すごく苦労したんだと思うんですヨ。

だから尊敬してマス。（笑）

H 酔っぱらうと、いろいろ話してくれますよ。京都でね、父は母の兄の友だちだったんですって。中学生と女学生でしょ、結婚するまで十年くらい、よくもったものだと思って。（笑）

G 私も何となく聞いたけど、父は冗談というか嘘ばかり云うから、どこまで本当なんだか。お見合いだったらしいんですけど、それで只なんとなく、適令期だったからこんなものでいいのじゃないかと、結婚したというらしいんですけど……。

私から考えれば、どうしてそんな妥協した様な結婚で今日まで仲良くやって来られたの

か不思議なんです。

熱烈な恋愛をして一緒になったのなら仲良くてもわかるけど、何となく結婚して、やって来られるなんて……。

最初なんでもなくても、一緒にいれば愛情が移るといふのか……。

司会 うーん、それはそうかもしれないわね。

F 僕は知らない。聞きたいとも思わないですね。見合いらしい、とは思いますが……。

どうも両親をみると、結婚なんて妥協の産物じゃないか、そう感じてきますね。何となくという感じで、現在に飽き足らなくても別れるほどでもなく、満足でもないけど、不満でもない、という夫婦が多いんじゃない

かと思えますね。

B 私は妬けるから自分から聞かないの。でも、
すいぶん聞かされました。

長野の家で知り合って、父は長野と東京の
間を行ったり来たりしたらしいの。

父の学生時代のことですけど。

母は男女共学の経験もほとんどないしお嬢
さん学校をバードと出て、始めて会った男性
じゃないかと思うのネ。

大恋愛だったというんですけど……

大学生時代に会って、つき合って、ハイ結
婚でしょ。母の場合は、父みたいな人であっ
て良かったと思うのネ。(笑)

運が良かったのじゃないかと思うわ。

司会 運悪く、おかしい相手じゃなくて良かっ
たわね。

B 本当。もっと巾広くつき合って、というの
じゃないから……、運が良かったとしか云えな
いわね。

D うちは二人が同じ役所に勤めていて、同じ
グループで、ケンカ仲間みたいだったんです
って。

まさか、こんな人と結婚するとは、という
感じだったらしいのね。

数年間付き合ってから結婚したらしいです。
仲良いですよ。

E 全然知らない。多分、大阪でしたと思うけ
ど……。

母が二十一、父が二十七位の時だと思っ
て、母がとても金持ちで、母の家がネ。父は
すごい貧乏だったらしい。どうも計略結婚の
ような気がするワケ。父が金持ちの娘を探し
て結婚したという。(大笑。ケツサク、ウマ
クやった、などの声)

本当に、兄と僕が生れる頃まで仕事しない
で、お酒ばかり飲んでた。大変だったと
思いますね母が……。今はちゃんとしています。

司会 そういふ話聞いて、どう思う。

E 僕もそうしようかな、と思う。(大笑)

D うちは父がお見合で何度も振られた後で、
母は初めてのお見合。同情して結婚したみた
いなものだった母が云うんです。

でも、やっぱり考えてみると、もっと良く
人を知ってから、母の理想の男性を探して結
婚するべきだったかな、って云っています。

でも、結構満足してるみたい。

私はお見合ってイヤだなア。

A みんなお見合ってイヤみたいだなア。

子どもから見れば

どっちもどっち

司会 じゃ次に、お母さんがお父さんのことを
子どもに「こぼす」ことってあるかしら。又、
その逆のことね。

A うちの場合は、母が家を空けると父がイヤ
がる訳。それがイヤだと、母がこぼしますね。

司会 たって、お父さんが会社に行ってるとき
はいいんでしょ。

A そういうのには関係なく。とにかく、主婦
は家にいないことは良くないことだと……。

とにかく理屈じゃないんだから。自分のオ
ナは家にいるべきだという。家に帰ったら
いつでも居るのがいいという……。まさか、
他の男が手を出す訳はないのに。(笑)

司会 そりゃあ、わからないわよ。

A ありゃあ……誰にも……とられないと思うんだ
けどなア……(大笑)

F うちの場合はオフクロは教師みたいなこと
して外へ出てるし、オヤジも良くわかってい
るし、二人ともかなり年もいって、戦前派に
属してるけど、そういった籠の鳥みたいな意
識はないんですよ。こぼすのは、しゃっ中で
すね。

でもそれは気休めみたいなものだから。

子どものことをワーワー云ってるうちに、
夫婦の云い争いみたいになっちゃってる。

理解し合ってる風なこと云ってるけど、不
満はあるんですね。

司会 子どもの教育について、意見がぐいちが
うわけ?

F そうですね。全然ちがうんですよ。

オヤジの方は、子どもに合った様に伸ばそ
うとするけれど、オフクロの方は、買いかぶ
ってる、というか……。

オフクロに云わせれば『お父さんはああ云うけど、そんなのでたらめた』というし、オヤジは又反対に『お母さんはそう云っても、現実はどうだ』という。

ばくは、もう『どちらもごもっともです』と云うしかない。(大笑)

E ばくの処は、父が一方的で、母がひっ込んでしまう。父親の絶対権力。

家が手広く工場やってて使用人も多いので人を使うのがうまいのかな。

D 私は母と「理想の男性像」なんて話し合いますけど、そういう時に母が云うんですよ。

お父さんみたいな人じゃなくて、日曜大工の出来る人と...(笑)

不器用なんです、父は。だから、母はそう思うのね。もっと絵なんかの趣味のある人と結婚すれば良かったろう、とか。昔から父の云うことはかり聞いてなくて、もっとしっかりしてればよかったとか...。それで結局は、姉や私に、よく人を見て選びなさい、なんて云うの。

それは、父を批判してるのじゃなくて、父は父としてそれでいい、だけど、あなたたちは...というわけでしょう。

司会 お父さんは?

D 父は、「ママのこと愛してるよ」なんて...(大笑)

C うちでもお母さんとボーイフレンドのこと

なんか話してる時に、お父さんのことが出るのね。

お父さんはやさしい人だけど、情緒が足りない。本を読まない、結婚したら勉強しない、なんて親子で話してるの。

司会 だけどあなたのところは、恋愛して良く見て結婚したんじゃないかったの。

理想の男性じゃなかったの。

C そうでもないらしいの。

当時はお父さんもお母さんの仕事に理解があったし、人も良かったから、まアこんなところでしょう、と決めたみたい。

この人がバツゲンという訳でもなかったみたい。(笑)

H お母さんがPTAなんかで夜出かけたりするとブツブツ云うのね、だから出かけられないのが不満みたい。

でも絶対二人は喧嘩しないから...

B 父は母の健康をとてゑ気にするのね。そのために外出しすぎると文句を云うの。

そういう点では父の方が正しいと思う。

母は父の欠点を云いながら、実は私に云っているという場合が多いの。

それは父と私の欠点が同じだから、「本当にお父さんたら...」と云いながら、すごい目をして私を見るのよ、これはグチとは云えないでしょうけど。(笑)

父と母は 男と女?

司会 どうかしら、ご両親は仲が良いところを見せてくれる?

F お互いに無関心なんじゃないかな。みせてくれません。

A オヤジなんて、絶対見せてくれない。

夜なんて子どもでもない部屋で新婚当時の話なんかして、二人で楽しんでいるらしいのは知っているけど....。

G うちには良く二人でピクニックなんかに出かけちゃう。子ども...姉と私はそれぞれ忙しいから、もう生活が別になっちゃったのね。

だから勝手にしてくれていう感じでスイスイ出かけちゃうの。この間なんか伊豆に行っちゃって「海がきれいだったわね。」なんて二人で云ったりして...(笑)

C うちには郊外だから家庭菜園なんか作って、トマトだのナスだの...二人で楽しんでいるみたい。

E 去年の秋、赤ちゃんが生まれて、二人で仲良くあやしたりしてますね。

司会 お父さん、お母さんを、男と女だなア、と感じたことあるかしら。

A それが全然ないんだなア。

僕探してるんだけど出てこない。エッチだなア。(笑)

F そりゃあ新婚時代はそんなもんだっだろう

けど、でも、うちの場合は母が三十才近い時
で父も三十八才かそこらだから、晩婚の場合
はそんな雰囲気ないんじゃないかな。

E 僕の父は二枚目なんです。

父が外でモテた話なんかすると、母が怒る
んですよ。そんな時、その様子が女だなア、
と思わせることがありますね。

F そういう事を憚ってるのは日本だけじゃな
いかと思うんですけどね。

外国といっても沢山知らないけど、もっと
聞けっぴろげじゃないかな。

G うちでもあんまり気にしないで、旅行なん
か行くから、泊ってきたらって私たちも勧め
るけど、やっぱり帰ってきたりするのね。
構わないのに。

両親の力関係は……

司会 そういうご両親を見ていて、自分たちは、
こういう結婚をしたい、なんて考えることあ
るかしら。

E 父親を見ていると、僕は結婚したくない。
しない方が相手の人を傷つけないんじゃない
かと思ってしまう。

F 女の人の場合、父親を通じて恋人を選ぶっ
て云うけど、そうかなア。

C 本当にそう思うわ。

父親と同じか、正反対か、やっぱり基準み
たいなものがあるでしょう。

D でも、相手が誰でも、結婚すればどうにか
なるもんだなア……って、両親をみているとつ
くづく思います。

F 誰でもが結婚するということでもないでし
ょう。

独身主義の人もいるんじゃないかな。

G 生まれた時から父は父という感じで、別に
男性としてどうという見方はしてなかった
わ。

H 父みたいな人とは絶対に結婚しない、と思
ってるのは確かなの。(笑)

E 結婚については両親から教わるよりも、本
からの方が多い。

F そう、僕も物語などから得る方が多いよう
ですね。

A 僕は結婚ということについては、全然白紙
の状態なんだなア。

それよりも今はガールフレンドがほしいよ。
ほんとうにはいいなア……。(笑)

司会 お父さんは家事を手伝っているかしら。
C 手伝います。かなり自分からすすんで。共
稼ぎの習慣じゃないかしら。

F うち共働きなのに何もしない。
そのあたりが、オスクロにしてみれば少し
不満なのじゃないかな。

却って、こんな風ですけど料理でも、何で
もやるんですよ、僕は。

G ここ二・三年……姉が大学に入り私が高校に
入った頃から急に父が母に対して、やさしく
なってしまったみたい。

食事が終ると、サッサと片付け出すので、
私たちがあせっちゃうの。

B 私の父は昔からマメにやるの。

中学生の頃まで、どのお父さんもあんな様
に家のことやるんだとはかき思ってた。

両親が二人とも仕事を持っていた時は父は
母と同じ位に家のことをやっていた。父と
料理や洗濯なんか一緒にやっていた頃とても
楽しかったなア。今は、父の仕事(作家)が
忙しくなり、母が家事をする割合が前よりふ
えてるみたい。

A 操縦次第なのかなア……うちは、建前は頑固
で、タテの物をヨコにもしないけど、切羽詰
まればヨコにしたりするかもしれない……。

F 戦後、女性とクツ下は強くなったとか云っ
て男女平等、平等というけれど、それは外向
きの話だけで、家の中ではどうなのかなア。
結納というのがあつた頃は男の方が出す
という話を聞いて、それじゃあ女を買うこと
と同じじゃないかと驚いたんだけど。

結婚披露だって、ナニ家とナニ家で家同士
ですよ。ああいう風習ひとつにしても、親
から子へ伝わってゆくから……。

A 男が女より上であるために苦しむ女って、
本当に少数なんじゃないかな。だから男女同
権とか平等とかは職場での話で、家の中じゃ

そんなことないんじゃないかなア……。

B だってあなたの家じゃ、お母さんが外出するとお父さんが叱るっていったじゃないの。

A イヤ、それも、政府と同じできア、与党と野党みたいな関係で、どちらかというと「陳情」というみたいにな……。(笑)

C うちでは両親の話を聞いていても、友だち関係みたいで、どっちが上、下ということないみたいけど……。

D うちとはとにかく母まかせで、何ひとつ強いこと云わないから……。

G 私の母も働いていたんです。

始め一カ月の予定だったのが七年も勤めてしまったの。今年一月にやめましたけど。

昔は何かねだと「お父さんに買っていた」だったのが、そのうち「私が買ってあげるわ」になりました。

経済的に負目がなくなったのね、その点良かったみたい。

それに職場が若い人ばかりで、若返ったし……。

私の結婚

司会 理想の結婚について話していただくかしら。

A 別れさえしなけりゃいい。(笑)

僕の考えでは生活には波がなけりゃ、つまらない。だから喧嘩したり、どなり合ったり

してもいいし、当然だと思う。

三枚目の人がいい。(笑)しゃべり合える家庭が一番いい。

B 二、三回位別れてもいい、と思うな。結婚は一回きり、と決まなくてもいいんじゃないかしら。

余り父と似ていない人がいいの。神経質で、お医者さんみたいな人。(お医者さんは神経質じゃ勤まらない、の

声で……)神経の細かい人。すばらしい人。私は一生燃えていたいから。考えや趣味の同じような人。

C 向上していけるような相手がいい。いつも仲むつまじく暮らせる人がいいわ。やさしくって理解してくれて。

D 私のわがまま包んでくれたり、それでいつも同じように何でもできる人。しっかりして……。(笑)

(欲張りだなア……の声)私のやりたいことを閉じ込めないひと。私はちょっと人とちがうことをやりたいの。だから余計そう思う。

F 自分が内向的だから反対の性格のひとがどうしても好きになる。

前にある新聞で若い人たちの「結婚したい人」というアンケート記事があったけど、あの中に、「かわいい女」という答が多かった

んですけど、「かわいい」だけでいいのか、ちょっと不安なんです。

僕はA君のお父さんみたいに、女は男に属する、という様な考え方はできないけれど、でも、相手の人が生活のために働く——食べ

るために働かなくてはならないというのは、男として責任がないというか、甲斐性がないと思うんです。

趣味とか、どうしてもやりたい仕事があって外へ出るのはいいと思いますけど……、生活は男がみるべきだと思う。

もし、僕が結婚するならば：経済的な基礎が出来てから結婚したいし、そういう面では僕の責任で相手を幸せにしてあげたい。

H そんな幸せなんて、してほしいとは思わない。幸せに、なら、私の方からだって相手を幸せにしてあげたいわ。

経済的な面だって一方的に与えられるなんて、そんなの幸せじゃないわ。

G 一般的結婚はじたくない。いわゆる三食屋寝つきはイヤ。何もかも全面的におんぶするのは耐えられないと思うの。

家事労働に正当な価値をみつけての家庭内分業ならいいけど食べさせてもらうために暮らすのはイヤなんです。

この人といいたいから一緒にいる、それが自然だし、私の理想の結婚です。(まとも宮城)

家庭菜園のすすめ



八王子市 和田直久

(一) 自己紹介

昨年、我が家の奥さんが、世田谷区の貸農園の使用権を手に入れたのが縁で、約二十年ぶりに野菜を作る次第になりました。小生自慢ではありませんが、栽培歴だけはちょっとしたもので、小学校一年の頃、母親におだてられて二十日大根を作った……なんてのを別にすると、昭和十九年の春、都心を引払い、祖父母の隠居所であった東京都下調布町に疎開した時に、一家揃って開墾に努力した結果、最盛期には三百坪にも広がってしまい、農繁期には高校をサボリ(麻布です)小麦の脱穀をした始末です。その後、高度成長の波に乗って、畑は段々に花壇に変わって行き、三年位前経堂の社宅に移った時も、回りの人々が、キャベツの葉っぱの上に青虫を飼ったり、我が家の奥さんが、バラ畑の隅っこに、ミツバの根っこをコソコソ植えてんだりするのを冷笑的に眺めながら、小生はイギリスから桜草の種子を取りよせることに専念していたのです。さて、いざ貸農園に鉄を入れる段になると、昔取った杵柄とやらで、圧倒的な成果が得られるものと自負していたのですが、結果は人に自慢出来る域には、ほど遠いものでした。

(二) どうしたら家庭菜園はひきあうか

家庭菜園の目的を、レジャーや健康維持や教育的見地に求めれば答は

簡単ですが、一家の家計をささえる主婦は説得されないでしょう。基本的には採算をとるのはむずかしいことを納得しても、すこしでも実益の上ることを考えるのが人情でしょう。ではどのような方向に、実益を求めるのが利口な途でしょうか。

第一の方向は鮮度です。逆の見方をすると鮮度の必要としない野菜は作る価値のない野菜です。代表例は玉葱、ジャガイモ、サツマイモでしょう。とれたての味が格別の代表例はトウモロコシです。北海道から航空便で送って来たトウモロコシでも、家庭の採れ立てをすぐ焼いたものには甘味や柔かさが全く劣ってしまいます。昨年の小生の家庭菜園でも、子供に一番人気のあったのはトウモロコシです。一般にトマトやキウリのような果菜類、ホウレン草や、チシャのような葉菜類は、全て鮮度でスーパーや八百屋と勝負が出来ます。

第二は、チョビチョビと永い間取れるような野菜です。その代表例がニラです。一度植えておけば殆ど手がからず、一年中採れるくせに、そんなに安くはないものです。逆に素人には作るのはむずかしくても、大量に作って、上手に作ると、一度に多量の収穫の上るものは安くなります。代表例が白菜や西瓜です。このような野菜には、素人は手を出さない方が賢明です。逆に小松菜や山東菜体菜やタカナのようなナッパの類は、作るのがやさしく、特に秋口に蒔いた時には、間引きながら使って行くといくヶ月も持つのに、意外に店頭では安くはないものです。逆に収穫期が短い野菜は家庭向きではありません。六月にとれるように、キャベツや玉レタスを作るのは簡単ですが、うっかりするとトウがたったりくさったりしてきます。チャベックと言う作家は園芸マニユアでしたが、何故野菜を作らないのかと言う理由を、一日に一二〇箇の二十日大根を食べたくないためにと言っていました。私も収穫をグズグズしているうちに、梅雨のためにキャベツが腐って異臭が鼻につき、しばらくキャベツが食べられなくなることがありました。

第三に香辛野菜等を作ることです。店頭では高く、かつ大量に買わね

ばなりません。ミョウガ、シソ、サンショウ、パセリなど作るのには簡単ですし、ほんのチョット作れば十分です。今海外では西洋香辛野菜（ハーブ）の栽培がブームになっています。日本では種子を海外からとりよせる必要がありますが、小生も計画していますので、同好の士はわいふ編集部へ御連絡下さい。

最後に当然のことですが、栽培のやさしいもの、特に病気に強いものです。世田谷区の貸農園をいじって気がついたことですが、都市近郊の住宅地の中には、昔野菜畑であった所がかなり多いのです。所が長年野菜を作っていると病気がふえて、しまいには野菜が作れなくなります。小生が調布で花作りに転向した理由の一つも、トマトやキウリが作れなくなったからでした。近郊でこれらの作物を作っている農家を見ると、最盛期には週何回も消毒をしているのです。このようなことが、日曜百姓に可能でしょうか。世田谷区の貸農園もネマトーダと言う根につく寄生虫がふえ、大根やにんじんはコブだらけになる始末でした。

(三) 具体的なおすすめ品

これから作る野菜で、一応の成果の上るものをあげてみましょう。いささか平凡ですし、値もそう高いものではありませんが、まず苗を買うならナスでしょう。五月の初めに植えると、六月から霜が降るまで成りつづけます。作るコツはいい苗を手に入れることです。絶対に種苗店等で店さらにされたものはよしませう。次に本数ですが、四人位の家庭でしたら、五本までで十分でしょう。永く採りたいならば思い切った間隔を開いて植えることです。最低六十センチは開けましょう。最近の苗はたいがいビニール鉢に植えられていますので、枯れることは少ないようです。植える前にビニール鉢の中に水をジャブジャブかけ、植え穴にも水を一杯かけてその上に植えれば、あとは水をやらなくて大丈夫です。肥料は総合化学肥料を株間に一握り位入れ、あとは月一回位ずつ、同様に肥料をやりましょう。ナスは最初の花が咲くと、その辺りからわき芽

が二本出て、計三本の枝が自然に形を作っていきます。もっとも根元から脇芽が出てくることもあります。これはカキとりましょう。病気は余り心配がいりません。害虫としてはテントウムシダマシがつきますが、つけたらスミチオン乳剤でも使って駆除して下さい。このスミチオン乳剤は使える範囲がひろいので、買っておくべきでしょう。よほど乾くと赤ダニがつきます。葉が黄色くなったら、葉の裏に白い紙をあてて、枝をゆすると、紙の上に殆ど見えない位の赤い虫が動いているのに気づくことがあります。これが出た時には、葉の裏に霧をかけてやるとよいようです。殺ダニ剤もありますが特殊です。一年生の間は買うのを俟約しましょう。ナスを上手に作るコツは、少くとも樹の小さな間は、実を小さめにとることです。それだけで消耗が防げます。

種子を蒔くものではオクラはいかがでしょうか。デパートでも種子を売っていますし、四―五月に蒔けば、夏から秋まで収穫できます。何よりうれしいのはハイビスカスのような美しい花が咲くことです。畑に三十センチおきに数粒まき、あとで一本にします。肥料のやり方はナスと同じでけっこうですが、少し少くてもよいでしょう。病虫害も少く、アオムシがつく程度です。ナス同様にスミチオンを使いましょう。一番氣を使うのは収穫です。大きくすると筋っぽくて食べられません。指位の太さになった実を次々と収穫しましょう。最後に食べ方ですが、赤ダシの実にするのなら、最後の段階にうすく輪切りにしたものを放りこむことです。長く煮ると色が悪くなります。軽くゆでてショウユをかけて、もしくはマヨネーズをつけて食べるのもけっこう。細かくキザンで生でサラダに。天ぷらも乙なものです。食べるのにあきたら収穫しないので秋までおき、葉をとって樹ごと乾かすと、生花の材料になります。

では、これから作れる野菜のおすすめ品を、とりあえず羅列しておきます。

種子からでは、シソ、フダン草、トウモロコシ、つるありインゲン。苗からではピーマン、パセリ。

(完)



おわらわ

皆さんの声のひろばで
す。感想、提言、どう
ぞ何でも寄せて下さい。

二月の声をきき、本日一三八号のわいふ誌を
手にし、この一冊が誌になるまで、どれだけの
人々の御苦労がにじみこんでいるのであろうか
と思い一頁一頁開きました。本当に、東京の方
々へ改めて御礼申し上げます。

しかし私はとても不安を感じます。
会員五百名になってやっと続けていけるめど
がつくとのこと前途多難を感じます。

関西の時は二部会員というのがありまして一
人で二冊分の会費を払いました。しかし、これ
も希望者だけで、心から「わいふ」を続けて行
きたい人たちだけでした。私は二部会員に入り

ましたが、この位のことでは赤字をうめること
はとても出来ません。

なんとかしなければなりませんね。

滋賀県 三矢久子



お骨折のわいふ一三八号ありがとうございます。
した。皆様の御手数に感謝申し上げます。費用の
御苦労、充分に拝察致します。私には、まだ当
分引揚者の給付金というものがございましてので
これを有効にと思いつき、わずかですが五千円
同封申し上げます。近々、結婚致しまして、わい
ふになる娘たちにもお仲間入りさせられたらと
存じますので左記宛先にお送り下さいませ。

(後略)

枚方市 樺 逸子



座談会―夫と子は私たちのすべてなのか―は、
はからずも、私にとってはまさに今まではすべ
てでございました。若い時は、あんなに自分の
生き方を考え悩み張り切っていたのに私の人生
を大半を過ごしてきた今、これからは私の生き
方を本当に考えてみたいと思っています。

これからどうぞ「わいふ」を送って下さい。

熊本県 伊藤多恵子

東京の編集のみなさんこんにちは
「わいふ」一三八号ありがとうございます。

むさぼる様に読みました。関西の頃、五年位前
はよく投稿していましたが後は読み手ばかりで
駄目な会員でした。今後は出来るだけ書くよう
にしたいと思います。 大阪市 永堀のり子



(前略)

二月七日付の毎日新聞夕刊の記事を見て…と
書き出せば、私のような手紙を送っていらっし
やる方は他にも多数いらっしゃるかと存じま
す。「なんでもないただの主婦が、なんでもな
いただの主婦たちの文集を作ろう」と言うキャ
ッチフレーズがひどく心に残りました。

「なんでもないただの主婦」と自称される皆
様が日常どんなふうに着け止め、感じ、どのよ
うな文章として表わしていらっしゃるのか、と
ても心を魅かれる思いが致します。

(中略) 私、二十五才の新米主婦でござい
ますが、皆様のお仲間に入れて頂けますでしょ
うか？

府中市 上本葉子

「わいふ」発刊お目出とう存じます。

一口に言って全く期待通りの御本でした。

三四十才の主婦の最も共感すべきテーマを正直に、密度濃く盛りだくさんで、実に読みごたえがあり、勉強になりました。

こうした社会奉仕はいくら才能があっても中々実現不可能でございますのに……（中略）

次号を楽しみに待っております。来訪の友人阿武野房代さんが是非と会費をおいてまいりましたので今回よりお送り下さいませ。（後略）



東京都 野口喜子

新しい「わいふ」とても、しっかりしたもの、なんだかちょっとびり近りがたい感じがしないでもないですが、今まで通り私のようなつたない文でものせていただけるかしらと思ったり、いやあんまり幼稚な文では申しわけないのではと想ったり……でもあれだけ充実したものを作られるには大変な御苦労があった事とします。すまないという気持ちでいっぱいです。せめて一人でも会員を増やすよう努力せねばと思います。



神戸市 小川倍恵

本当に月日のたつのは早いもので、私が新聞に紹介された雑誌「わいふ」を初めて知って、もう一ヶ月になろうとしております。

新聞を見た時、私は思わず「これだ！」とき

けた位です。

夫婦共働きの生活、それをそ家事、育児にと、あっといふ間にすぎ去っていく毎日、大好きなあみものをする時間を作るのに四苦八苦で、健康に悪いと分りつつも、ついつい夜ふかしの続く昨今です。

それでも本を読むこと、随筆？まがいのことを書くこと好きなんです！一生懸命働いて、生きてきて、育児といったって今ではもう二人の息子も小学生、ハッと気付いたら私も三十七才になっていました。少し前までは、私の作った童話を喜んで子守唄がわりに聞いて寝た子供たち、今では自分の力で自分たちの世界を少しずつ築いているようです。私にも少しずつ私の時間を持てそうです。いえ持たなくてはと考えています。

本屋さんの店先には、たくさんの雑誌が並べられています。でも私は、そのどれも手に取る気持になれません。いえ昔からそうだったわけではないんです。

幾つかの雑誌も、とったこともあります。でも昔は、それぞれが特徴のあった雑誌も、この数年らいというもの、どれもこれも同じような……あきたらなく感じるの、私だけではいとおもいます。

そういう意味で、私がこの「わいふ」にかけると期待は大変大きいものなのです。積極的に参加もしていきたくて考えております。よろしく

お願いいたします。

編集部一同の方々のご健勝お祈り申し上げます。
青梅市 平子幸子



二月十八日付の毎日新聞で「わいふ」のことを知りました。表紙裏に書かれているという詩「日本のおんなたち、暮しのなかに閉じこもっているおんなたち……」私も同感致しました。花嫁修業らしいこと一切しないで結婚した私にとって一年間予約購読した或る婦人雑誌はそれなりに役立ちました。夫と子供のためにプロの主婦をめざしてマイホームを築いて行くという張り合いを与えてくれました。でもそれも二、三年の間のことです。一通りのことができるようになると、そんな独り相撲も張り合いが抜け、時々すべてが虚しく思われ出しました。そうした或る日、好きな園芸がきっかけで知り合った奥様と意気投合し、今まで一人で工夫し、一人でやってきたことをお互いに話し合い情報を交換し、さらに工夫を重ねて行くといった具合で、同じやるにも仲間がいるということがどんなに励みなるかを知りました。その方とはいわゆる主婦としての仕事の他に「人間として生きるということとはどんなことか」といった話もよくします。同じ人生論を語り合うにも学生時代とは違いか地についた感じで、とても有意義に感じました。子供の手が離れるまでは家の中でできる限

りの努力をしよう、何事であれ誠心誠意やったことはきつと役立つに違いないと、しかし井の中の蛙にならないよう目だけは絶えず外に向け先の見通しを持って今の生活を充実させなければと、そんな気持で日々を送っています。

「わいふ」という雑誌、そんな私の気持と一致した主旨のように感じましたので見せていただきたいと思ひお手紙した次第です。どのようにして手に入れることができるのか、お教えいただけたらと思います。名古屋市中 西淳子

おちおち

御誌のこと二月四日の「ひろば」及び二月七日の毎日新聞で知りました。私、現在或る同人誌に関係して居りますが、その原稿集め、編集、校正、発送の苦勞の如何なものか良くわかりません。毎日新聞の記事によれば、誌代と送料だけでやっていられる御様子、さしでがましい意見ですがこれから先御無理ではございませんか。紙代も印刷代も上る一方の時勢です、年間予約での金額では大丈夫とは思えません。投稿する人は自分の書いたものが活字となって本となつて残る楽しみがあります。金銭的にゆゆうを持たなければ、落着いた良い企画も編集も出来ないと思います。スタッフの負担などもつての外、皆で盛り立て有意義な同人誌活動にする為にも誌代を上げる必要があると存じます。

東京都 青木知子

わいふ誌続行ありがとうございます。でも多々難にぶつかることもあるでしょうけれど頑張つて下さいね。心から祈ります。私もこの所病魔もかけをひそめています。この一年、詩吟会に通っているおかげでしょうか。腹の底から大音声を発し、顔がカッとなる程、寒さもさることながら今年はストーブなしなんです。置ゴタツはしていますが、団地住いは朝は底冷えするのですが、人間何か趣味を持つことはよろしいものです。この所読み手に廻っていました。がボツボツ作文に取りかかりましょう。(中略)

体を悪くして仕事もしていませんが、うすらが二十羽、カナリヤつがい三、セキセイつがい、チャボつがい、キューカン、猫二匹、の世話、掃除、大変なのです。キューカンの餌をやるのが遅いと「オーイコラ」(これキューカンチョウ)ハイハイハイ私の返事(中略)とまあこの調子で、それが済んだらば、自転車によう乗れないもので、テクテクと、一時間の道を往復、市場通いです。「アホか、自転車にのれる練習せ」と主人に言われるけども、今から練習してケガでもしてみなさい、また病院に逆戻り、私は歩きますと頑張っています。(中略)オーバーなど着て行きますと「ああアツアツアツ」下着もみんな取替なければならぬ位に汗をかきます。「アツハハハお母ちゃんのストリップミリキなし」これは末っ子勝ちゃん。まずは近況お知らせまで。

大阪市 杉本輝子

御案内

★わいふの集いのお知らせ

会員の御希望により第一回のわいふの集いを持つことになりました。

日時 四月二十七日(火曜日)

午後一時～五時まで

場所 東京都教育会館

地下鉄東西線 神楽坂下車

(飯田橋、赤城神社方面出口)

徒歩一分。赤城神社の隣のビルです。

会員の皆さんと一緒に、いろいろのことを、語り合いたいと思います。お目にかかれるのを本当に楽しみにしています。

みなさんどうかお出かけ下さい。

御 礼

一三八号が発行されてから、皆さまから沢山のお便りをいただきました。励ましのお便り、お叱りのお便り、ご教示のお便り、どれも貴重なものばかりで、全部を掲載できないことが残念でなりません。

とくに枚方市の樺逸子さんが、引揚者給付金という尊いお金をカンパして下さったのをはじめ、カンパをお寄せ下さった皆さまには、本当にお礼の言葉もございません。紙上を借りて改めて厚く御礼申し上げます。

お 願 い

さて会員みなでの「わいふ」づくりのために、さしあたり、みなさんのご協力をお願いしたいことが二つあります。

(一)「内助の夫」に適当な候補者をご推薦下さいませんか。

(二)「食品情報」に、ニュースを提供していただきたいのです。以上なるべく四月二十日まで。

その他、こんなテーマを取りあげてほしい、とお思いかた、どうか気軽に編集部までご一報下さい。締切日は特に設けません。

140号テーマ原稿募集「家事を洗い直す」

一口に家事といっても、子どもの多い主婦と少ない主婦、働く主婦と専業主婦とでは、家事の比重がずいぶん違います。

その上家事が楽しい主婦もあれば、嫌いな主婦もあり、家事は自分だけの仕事、と思っている主婦もあれば、なぜ私だけが、と割り切れない思いを抱いているひとも多いのです。あなたにとって、家事とは何でしょうか。

皆さまのご投稿を通じて、家事が女の生活に占めている基本的な意味を発見していきたいと存じます。家事の好きなかた、嫌いなかた、どうかふるってご投稿下さい。締切は、四月二十五日、長さ二千字まで。

141号テーマ原稿募集

人生を半ばまで歩んできて、親となったいま、あなたは過去の自分を振りかえって、子どもにどんな未来を期待されますか。

「男の子に期待するもの」
「女の子に期待するもの」

こう書いただけでも反撥をお感じになるむきがあるかもしれません。しかし男女差別の厳然としてある現実のなかで、それを経験してきた親が、男の子、女の子の未来にそれぞれ期待するもの……そのようにお読みとり下さい。

締切五月二十五日、長さ二千字まで。

編集後記

▲138号ができてはじめて、雑誌は内容ばかりではない、表紙、活字、紙質、版の大きさ、イラスト、わりつけ……渾然一体となつての作品なのだということを思い知った。素人の悲しさである。

139号では前号の失敗を生かすべく、細心の注意を払ったつもりだが、タイプオフという基本的な制約のもと、不安ばかりが先に立つ。▲それでも表紙絵の新居田郁夫さんはじめ、多くのかたがたの御厚意に支えられて、139号が誕生しつつある。

▲思いもかけず、毎日新聞の社会面に取りあげられたおかげで、新しい会員が七十人近くふえ、その中から以前編集の仕事をしていた宮城道子さんがスタッフに加わられた。子育て真最中の若いお母さんである。

▲編集部の亀山さん、目下アフガニスタン旅行中。照井陽子さんは実務がやはり苦手、と編集を下りられた。今後書き手としての活躍を期待したい。

(T)

<わいふ> 139号 1976年3月25日発行 定価300円 年間予約1,200円・送料720円

発行所 わいふ編集部 東京都新宿区加賀町2-3 田中喜美子方 電話 260-5500・269-2388

編集 荒木弘子 亀山利子 田中喜美子 林慶子 宮城道子 和田好子

印刷所 東京都新宿区岩戸町10 チトセ印刷★振替注文は東京5-110430 わいふ編集部へ

